個人史～大きな歴史の中の小さな歴史～

二〇二三年四月四日

はじめに

六十をもう十一年も超えて生きてきた。六十七歳で逝った母より長く生きているというのはふとふり返ると感慨である。しかしまた、なんと昔のことをよく覚えているものだ、実はまだほんの少ししか時間は経っていないのだとも思う。

この六十数年、世相は大きく変わった。幼少期の生活は貧しかったがそれなりの落ち着きがあった。四季のうつりかわりとそれによって画される日々の生活があった。私は、当時の世間の一般的な上昇志向をもったものとして青少年期を生きた。

その人生は一九六八年を経た七一年を境に少し変わった。一九七一年の転換はだれでもが経験する青年期の悩みのなかでの出来ごとであったが、それがあの時代に促されて起こった。六八年の青年反乱は、いまふり返るなら、経済を第一とする時代から人を第一とする世へ転換してゆく、そのさきがけであった。転換期は、世の既成の権威とその制度から離れたところで生きる者を生みだす。私もまたその端くれであった。

以来、試行錯誤ばかりである。一人の小さな経験が、この大きな転換の時代の中でのことであると認識できたのは、近年、つまりは二十一世紀になってからである。大きな転換期のなかでの、小さな試行錯誤の一端を、いささかの反省と総括を加え、書きおこうと思う。

制作経過：

2002.1.10「故郷・宇治」として制作をはじめる。
2006.6.15「京都という場」「数学と孤独」円空模写追加。
2009.2.5「専従として」若干改訂。
2010.5、2011.3 写真追加。
2015.12.28「はじめに」改訂。
2017.1「あとがき」追加。
2018.5.24「あとがき」追加。全体若干改訂。
2018.7.12「はじめに」「場を作る」「あとがき」改訂。
2018.10.31「故郷宇治」改訂。
2019.12.6「父母の言葉」冒頭改訂。
2020.5.20「父母の言葉」順序等改訂。
2022.4.4「専従として」改訂。

目次

はじめに　1

故郷宇治　3

宇治の記憶　3
宇治の歴史　6
継承と断絶　10
父母の言葉　12

京都にて　19

不安と求道　19
数学と孤独　21
転換と自立　26
京都を出る　29

教員時代　33

数学教師　33
地域と共生　35
言葉と文字　38
人として　40

場を作る　45

専従として　45
日記から　50
手紙から　58
青空学園　72

追悼文　77

亀井豊永君　77
上田等さん　78
飯沼二郎先生　79

あとがき　81

故郷宇治

故郷は事実である。宇治は私の故郷である。私にとって宇治はまず何より宇治川である。宇治川の流れは、琵琶湖とともに古い。はるか古代に人がこの日本列島に生活をはじめたとき、宇治川はすでにあの独特の川面の香りをただよわせて流れていた。宇治川べりに住んだことのあるものがまず思い出すのは、岸辺に立ったときの川面の香りである。あの香りは懐かしい。

宇治の記憶

自らの記憶の最も古いものは、祖母が亡くなったときその棺をのぞいたことだ。一九四九年の死であるから、二歳になったばかりのときである。あごを棺の端にのせてのぞいたときの高い棺の印象が記憶に残っている。その次は天橋立である。父は戦時中徴用で、舞鶴の軍需工場で働いていた。それで戦後、父母と私でその舞鶴へ旅行した。そのとき列車の窓から立ってみた見た天橋立の姿が今も残っている。第三は、妹の誕生のときである。昔はみな産婆の世話で自宅で生んだ。それをまつため父と二人で借家の二階に上がった部屋の記憶である。そしてもう一つは、母が私を寝かしながら語ってくれた昔話である。覚えているのは、草原が火の中で兎が道案内をするというものであった。見返り兎の話しを子供心にそのように受けとめたのかも知れない。

これらはみな、小さい自分に残る切りとられた光景である。そして、五歳のころ宇治川べりの借家に越した。その借家を下見に来たとき、父が川べりの出廊下の手すりに手をかけて川をながめていたのも覚えている。

幼いときのことごとから思い出されるのは、ゆっくりと時の流れる地方の街での、自然との交感である。宇治川が形成した扇状地は大きくない。その要の宇治川東岸の山麓に日本最古の木造建築である宇治上神社と、その川側に宇治神社がある。誰がいずれに祭られているのは時代とともに変わったが、いずれにせよ応神天皇とその子である菟道雅郎子、仁徳天皇がそれぞれに祭られている。この辺りが、二歳のころから八歳のころまでの子供時代の遊び場であった。

源氏物語宇治十帖に出てくる家屋敷も、紫式部が想定したのはこの辺り以外に考えられない。子供にとって宇治上神社は原っぱの続きにある社であった。そこに桐原の泉がある。小さな木掛けの囲いがあり、水が湧き続け

ている。宇治上神社の拝殿の下は砂地である。そこに萱つり草が午後の日のなかで静かに揺れているのを泉のところに座って眺めていた。この地下水が続いているはるか向こうの深い闇を背にして眺めていた。何歳の頃のことなのかわからない。確かにそういうときがあった。

故郷は懐かしいにおいでもある。土のにおい、青草のにおい、それらがむせ返るように子供の全身を包む。宇治川は独特の青臭さを含んだ香りをもつ。四歳から八歳までは宇治川に沿った道沿いの裏が川に面したところに移り住んでいた。川のにおいは、朝のにおい、夕べのにおい、夜のにおいとすべて違うし、季節によってもまた違う。それが川風とともに流れる生活のにおいであった。宇治川は、長い川ではない。しかし源が琵琶湖であるために流れは深い。川底は苔むし水草も生い茂る。風とともにくる川面のにおいが故郷のにおいである。初夏の頃から秋口まで、川の虫が夜の灯を求めて飛んでくる。虫まで川のにおいがするのである。川に面した縁側に、夜ともなればカゲロウやトビゲラ、ヘビトンボ、そしてミズスマシやゲンゴロウがやってくる。虫の織りなす世界が、川面の闇を背に少ない灯りのなかで繰り広げられていた。そして新緑の頃には新茶の香りが町中をただよう。新茶を干す香りとともに茶の葉を炒る香りもまた街を包む。それが宇治の街であった。

故郷の宇治は、四季折々の風情が祭と結びついている。

正月の三が日は別の世界であった。

家には小さい神棚があった。何が祭られていたのかわからない。大晦日に父が神棚に灯明をともして、翌日の別の世界の別の時間の始まりが用意される。その灯明のろうそくの光の静かな揺らぎが、ちがう世界を示していた。その頃竈(かまど)はまだ土間にあった。ここにも小さな門松をかけ、十二の餅といっていたが、小餅を十二個つけてひとつにしたものを鏡餅として祭った。おそらくは年占いの名残なのだろう。ここにも灯明を上げる。

本家は茶問屋で商売人だった。それだけにしきたりは伝えられていた。大晦日のあの別の世界の準備と期待感は忘れられない。商売人の世界にも確かに農耕に由来する風習が生きていた。そして三が日である。ハレの世界である。三日間はそれはそれはすぐに過ぎてしまう。過ぎゆく正月の名残の感覚も忘れられない。正月五日の県神社の初祭りがあり、続いて太神楽の獅子舞が家々を回り、そして再生の感覚は節分へと引き継がれる。

二月はいちばん冷たい時節であった。失われてゆく正月の感覚とまだこない春の狭間である。三月は美しい時節であった。再生し新たな農耕がここにはじまる。旧暦の正月前後はまさに籠もるときであった。青虫がさなぎなって繭に籠もりそして時節の到来とともに蝶になる。農耕文化の経験に起源をもつこの死と再生の感覚は一連の正月行事のなかに生活の記憶として受け継がれていた。

宇治川の岸部に立つと、北の方に広々と平野がひろがり、はるか彼方に京都の愛宕山が見える。橋のたもとから見える冬枯れの街は空間に光のみが明るく広がる音のない世界であった。今と違い家々はもっと枯れた色をしていた。畳の冷たさ、火鉢の炭火にしもやけの手をかざす温もり。そのような冬にも竈に置かれた榊の葉はあくまで青く、乾いた風が土間を吹きとおっていった。山麓の冬枯れの木立に虫たちの繭がじっと北風を耐える。光は明るく、風は冷たく、白雲が流れ走る。三月になればもう新しいときである。三月はほのかに輝く黄緑の世界である。こうして、また一年が過ぎてゆくのであった。

宇治は茶畑と竹藪が多い。茶畑をぬけて竹藪の周りの畦をよく歩いた。空は青く藪をとおすこもれ日が照る。日だまりの空間に射干（しゃが）の白い花が孤独な一隅を作っていた。私はこのアヤメ科の多年草に見入るのが好きだった。秋になれば虫の音を聞くのに時間をつかった。西日がさす晩秋の家の裏の宇治川東岸、その西日のあたる石垣には昼間の暖が残っている。沈みつつある夕日がまだいくらか届いている薄暗い石垣の上に、暖かさを求めじっとする蝿が一匹。風とともに来る川のにおいを背に永遠の時を生きていた。

一九五五年の台風で宇治川が氾濫、川縁の家は床上まで浸水、橋寺という高台の寺に避難したのを覚えている。その日伯父が駆けつけてくれたことも、夜になって勤めから何とか帰った父が、水が引きはじめたといっている声を今も覚えている。父母も伯父も他界した今、それを覚えているのは私だけだ。記憶とは不思議なものだ。水がゆかの上まで押し寄せた後の始末は大変だった。

洪水に懲りて、私が八歳のとき転居した。移った家は、県神社と御旅所を結ぶ平等院の裏街道筋に面した、戦前からの三軒長屋であった。後には車が多くなったが、移り住んでからの数年は落ち着いた街道であった。三月の日光が窓をとおして畳を照す。街道を通るもの売りの声が静かに小春日和の明るさのなかを二階のまで届いてきていた。

宇治の祭りは二つある。

一つは六月五日の県神社の祭り。

深夜に街道筋の明かりを消して、梵天と呼ぶ御幣が県神社と御旅所へわたる。県神社の氏子は地元ではない。河内や摂津のあちこちの講である。街道筋の家はお宿と称して家の格子をはずし開けはなって講の人に貸す。昭和も四十年代に入ってからは、格子をはずさず、踊る姿が格子越しに見えるという風情になった。それ以前は格子をはずして沿道と「お宿」は直接につながっていた。家では母が鯖鮨をつくる。

小学校は午前中で終わり。この習慣は学校と宗教の分離で早くになくなったが、今でも半ドンで帰るときの祭りに向かう気持ちの高揚を覚えている。なぜ県神社の氏

子が大阪の講なのか。仁徳天皇の時代に大阪が干ばつで苦しんでいたとき菟道雅郎子の魂が雨を降らせたことに始まっているという言い伝えがある。河内平野を背後にもつ仁徳と菟道雅郎子のつながりが現代にもおよんでいた。

もう一つの祭りは宇治神社の祭りである。

五月八日から六月九日へ順次進んでいく。御輿の担い手も順に地元から出す。これが宇治の地元の祭りだと教えられていた。宇治の街に夏の到来を告げる県神社の大幣神事と宇治神社の還幸祭は、六月八日に中宇治地域一帯で催される。病魔退散と豊作を祈願する伝統ある大幣神事は午前十時から県神社大幣殿で式典・祭典が開催。この後大幣座の一行が出発し、県通り・宇治橋通りを経て宇治石油前の交差点まで巡行。続いて午前十一時半から馳馬（四往復）が行われる。最後に大幣と神馬が県通りを宇治橋へと走り抜け、宇治橋下流側から大幣を投げ捨てる。

いずれの祭りも、新茶の取り入れが終わりその薫りが街に流れているときである。これが長い時間くりかえされてきた季節への感覚と一体となった年中行事であった。

宇治の歴史

百人一首にある喜撰法師の歌「わがいほは　みやこのたつみしかぞすむ　よをうじやまと　ひとはいふなり」以来、宇治は「みやこのたつみ」、つまり京都の東南にあるものと意識されてきた。が、それは平安時代に生まれた京都を軸とする意識であって、宇治は京都盆地にみやこができるよりもはるかに早く開けた。宇治の歴史は、二世紀、今日の「木幡」という地名のおこりと言われる、許国（このくに）が宇治地方に成立していたところにさかのぼる。この時代の日本列島には多くの小国家が郡立していた。ちなみに「木幡」は「許の国の端」、つまり「許端」からきているといわれる。

宇治は、琵琶湖を流れ出た水が湖南の山塊のあいだをとおりぬけたところに拡がる扇状地にある。大阪平野から淀川をさかのぼり、陸路に出てさらに東に進もうとすると、半世紀前まであった宇治川の遊水池・巨椋池（おぐらいけ）に出会う。巨椋池の東南が宇治である。大阪平野と東日本を結ぶ交通の要地にあり、日本列島西部の勢力と東部の勢力が陸上で出会うところであった。ユーラシア大陸の東縁に位置する日本列島は北海道から樺太、そして千島列島を通ってアジア大陸東北部につながる線と、九州北部から朝鮮半島、また琉球弧から海の道を経て中国南東部につながる線があり、その南北二つの線からこの日本列島弧に進んだ人が出会うところ、それが宇治であった。

宇治川に橋がかけられたのは律令体制のもとにあった大化二年（六四六）のことであり、橋のたもとに市が立

ち、そして街が開けた。今も盆の前には朝市が出る。東と西、東西の縄文、縄文と弥生、東西の弥生、さらに大陸からの渡来者と土着の勢力が、この宇治の地で出会った。この出会いとその蓄積が、竹取物語、源氏物語、今昔物語、宇治拾遺物語などの物語を育てあげた。

宇治という場の性格を定めたのは、応神天皇の子で仁徳天皇とは異母兄弟になる五世紀の人・菟道雅郎子（うじのわきいらつこ）である。私の小学校は「菟道小学校」と書いて「とどう」と読む古い学校であった。菟道雅郎子がこの地に来たとき、道に迷ったところ兎が現れて、道を振り返り振り返りしながら案内した。この『見返りの兎』の伝承から菟道という地名がおこった。それが小学校の名前なのだと何度か母に聞かされた。兎の道案内という話は南方熊楠の『十二支考』にも記されており、イギリスはじめ各地にある。戦後はもう日本神話を学校で習うことはなかったが、親の代が覚えた昔話として成長の過程で印象の奥深くに刻まれている。菟道雅郎子という名は宇治に育ったものにとって、深くはわからないままではあったが、忘れがたい名なのである。

古事記と日本書紀によれば、菟道雅郎子は応神天皇の末子で幼少より聡明であった。百済の人である阿直伎について典籍を習った。まだ文字で日本語を書き記すことがおこなわれず、思想が口承によって形作られ受け継がれていた時代に、雅郎子は文字というものそのものの意味を理解した。さらに文字が表す内容について深く把握した。翌年、同じ百済の王仁がきて阿直伎に代わり師となった。彼らが文字をもって考えることを日本人に教えたのである。

このとき伝わった思想は儒教である。雅郎子の時代、中国文明はすでに巨大な文明として成立していた。紀元前千数百年に成立した殷からは二千年近い時間をかけた成熟を達成していた。雅郎子の時代から今日に至る時間がすでに経過していた。雅郎子はその文明を理解した。百済と日本の関係はまだ明確でない。ただ当時中国は五胡十六国の時代から北魏と宋の南北朝時代へと大きく動いた時代であり、朝鮮半島もまた高句麗、百済、新羅がこの中国の変化を受けて激しく動いていた。六六三年の白村江の敗戦によって倭政権が朝鮮半島から撤退するまで、四、五、六世紀のあいだ日本と朝鮮は一体となって動乱の時代をおくり、そのなかで地域的な協働体を超える新たな国家が形成されつつあった。

日本という意識がすでに形成されていたのかわからない。「日本」自体は中国からみて、日の出る国ということであり、大陸人の視点である。当時はまだ、東アジア全体のなかに、倭政権あり、高句麗、百済、新羅の政権があり、そして大陸の諸政権があり、ということであったのかも知れない。雅郎子はそのような時代に生きたのである。百済からの知識人がはるばる渡来したのは、百済

からみれば新羅に対する同盟の相手としての倭政権への連帯であった。『日本書紀』の応神天皇のくだりには「二十八年秋九月、高麗の王が使いを送って朝貢した。その上表文に、『高麗の王、日本国に教える』とあった。太子菟道雅郎子はその表を読んで怒り、表の書き方の無礼なことで高麗の使を責められその表を破り捨てられた」。日本書紀のなかで菟道雅郎子のこの行為は、新興の支配階級の知識人の毅然とした態度として描かれている。日本における漢字使用は、『宋書』倭国伝に「倭王武」の上表文として、四八七年という書かれた年代とともに明確な跡を残している。これは菟道雅郎子のときからおよそ半世紀後のことである。

応神天皇は雅郎子を後継皇太子に指名した。その翌年応神天皇が死ぬと、年長の異母兄大山守皇子が反乱を起こし菟道雅郎子を襲う。もうひとりの異母兄大鷦鷯（さぎ）皇子が雅郎子に知らせ、雅郎子は木津川で大山守皇子を殺す。だが雅郎子は大鷦鷯皇子こそ即位すべきとして自らは即位しようとしない。大鷦鷯皇子もまた難波にあって先帝の遺志を守り即位しようとはしない。雅郎子は、日本の習慣としてあった末子相続を、自ら学び思想となった儒教で否定し、年長のものこそ即位すべきだとしたのである。だがこれは同時に父の遺志に背くことになる。儒教思想に立つなら、いずれにせよ矛盾するのである。ついに雅郎子は自死する。こうして大鷦鷯皇子がやむなく即位し仁徳天皇となる。菟道雅郎子は思想に殉じて死んだ。

これが古事記と日本書紀に描かれた菟道雅郎子である。事実として何があったのかはわからない。三人の皇子は異母兄弟である。それぞれの母親の里の勢力が背後についていた。雅郎子には菟道の土着の勢力が、大山守皇子には大和盆地内の古い勢力が、大鷦鷯皇子には河内平野の勢力が、背後にあった。雅郎子と大鷦鷯皇子が連合して大山守皇子を倒し、そののちに雅郎子の勢力が大鷦鷯皇子によって倒されたということかも知れない。残された播磨の国の風土記の断片に「宇治の天皇」という記述がある。雅郎子は即位したが早々に殺され、即位自体が否定されたのかも知れない。そして日本書紀の書かれた時代には、天武朝と雅郎子の背後にある菟道の勢力との関係が敵対的なものではなくなっていたがゆえに、このような和解の物語として描かれたということは大いに考えられる。また儒教に殉じたということも、中国を意識して対外政治のために書かれた日本書紀であるから、このように脚色されたのだとも考えられる。倭政権にも儒教に殉じた人がいたのだということを強調することは、大いに意味のあることであったはずである。

雅郎子の時代から日本書紀の時代まですでに三百年が経過している。だから日本書紀の記述をそのまま歴史的事実とすることはできない。儒教もまた当時の日本の支

配階級とその知識人にとって内部からの必然性はなかったはずである。ただ、中国の支配思想であり、また朝鮮が中国と同じかそれ以上に儒教が広まっていたから、それに対抗して日本書紀では、儒教に殉じたことにしたのかもしれない。日本書紀を成立させた天武の王権は、万世一系の物語のために菟道雅郎子の即位を無視し、さらに仁徳との争いも和解の物語に作りかえたと思われる。日本書紀の記述は、内発的なものではなく外を意識して組み立てることによって体裁が形成されていた。日本における思想形成の基本的な特質である外因依存の傾向性を備えている。はじめて文字で書かれた歴史書がすでにこのようなものであった。

菟道雅郎子は文人として死んだ。菟道雅郎子の墓は宇治川東岸の山塊そのものである。雅郎子の屋敷があったと考えられる宇治上神社は東の山を背にその山塊の麓に位置している。応神天皇の時代にその皇太子菟道雅郎子がはじめて漢字とその文明を理解し修得したこと、それが朝鮮中国日本が一体となった東アジアの激動と交流のなかで実現したこと、菟道雅郎子が宇治という東西の勢力の相交わるところで皇位継承に絡んで若死にしたこと、その墓が宇治の山塊であり、その居住跡が宇治離宮・宇治上神社であり、宇治の地の基本的な構造を決定していること、これらは確実なことである。

後世、宇治という地は古事記や日本書紀のこのような記述によって理解されてきた。たとえば紫式部の源氏物語宇治十帖はこの宇治の構造をふまえそれを下敷きとして編み出されている。「思想に殉じた最初の人である菟道雅郎子」という日本書紀の記述が宇治を根底で支配してきた。

菟道雅郎子は、東方の勢力と西方の勢力がせめぎ合う現実の土台のうえに、圧倒的に優勢な中国文明を理解し受容し自らの思想としたのである。だが、雅郎子は自らが中国文明を自己の思想とすればするほど、自己の土台である現実の世界から遊離していくことを知っていたのではないか。そのようなものが王たる国家は根本的に脆弱であることを理解していたのではないか。

それに対して大鷦鷯皇子はたとえ聡明さにおいて雅郎子に劣っていたとしても、即位して四年の春に民の竈に煙の立たないのを見て三年間の課税を停止し、三年の後に「人家の煙が国に満ち、人民が富んでいる」とのべたことが事績としてのるように、現実の土台に立脚して王権を確立することのできる人であった。雅郎子は大鷦鷯皇子のこの本質を見抜いていたのである。確固とした権力をうち立てるのにいずれが適任であるのかを知っていたのである。だから、日本書紀に述べられているとおりに自死したのか、あるいは大鷦鷯皇子と争って死んだのかは、実はいずれでもよい。いずれにせよ、ある方法でより王にふさわしい大鷦鷯皇子を後継者にするために自

らを滅ぼしたのであることに変わりはない。

応神、仁徳に関するくだりからは、雅郎子を軸に、日本語の成立と政治権力の場における知識人の運命を読みとることができる。宇治はこのような歴史の舞台であった。雅郎子のこの問題は、宇治の問題なのではなく、実は、今日に至る日本の知識人と思想の運命に関する問題である。

宇治は物語の場所であるとともに、また幾多の戦場ともなった。とりわけ寿永三年（一一八四）源範頼・義経軍と木曽義仲軍との戦い、承久三年（一二二一）の後鳥羽上皇軍と鎌倉幕府軍との戦いは、いずれも日本政治史の画期となるものであった。源平の戦いの時代からさらに下って戦国時代には、山城の国一揆の根拠地ともなった。

さらに近代には山本宣治が出た。彼は、日本軍国主義に対して闘いぬいた。一九二九年春、治安維持法改悪反対の演説をおこなう予定で草稿を準備していたが、一九二九年三月五日与党政友会の動議により強行採決され、討論できないまま可決された。そしてその夜、軍国主義者の手先となった右翼団体である七生義団の黒田保久二に刺殺された。このとき治安維持法改悪に反対したのは、山本宣治ただ一人であった。

それに先立つ日、彼は全国農民組合大会で「実に今や階級的立場を守るものはただ一人だ、山宣独り孤塁を守る！　だが僕は淋しくない、背後には多くの大衆が支持しているから…」という有名な演説をした。宇治川西岸の小高い岡の上の墓地にはこの言葉を刻んだ碑が立ち尽くしている。それは、一九二八年三月一五日に続いて、一九二九年四月一六日に共産主義者への一斉弾圧があった年であり、日本軍国主義が破局の道に踏み出したときであった。

継承と断絶

人が故郷を思い出すときに浮かべる心像風景は一代かぎりの個別の人だけのものである。自己が滅したらもう何も残らない。だがにもかかわらず、一つの風土とその風土のうえで営まれる生活の場の風景として、その心象の核となるものは共有される。私にとって故郷は、人の真実をかたるときその人間の具体的事実そのものとして不可欠である。故郷と故郷の生活は、人が転換を迫られたときに立ちかえる原点である。

資本主義は故郷を奪う。政治のゆえに故郷にいられなくなるということもあれば、経済活動を通して故郷が変わってしまうこともある。故郷が平均化され、その固有性が奪われることもある。それだけに、事実としての故郷を書き留め、人が守るべきものを考えたい。

私が生きた短い時間のなかでも人の土からの遊離は大きくすすんだ。新石器革命からこの方、人は土との交感

をどれだけ失ってきたのだろうか。人がこのように土から離れていくということは一体何を意味しているのだろうか。失ってきたことをどのような形で取りもどすのだろうか。取りもどせるのだろうか。

今日の日本語の言葉としての土台は長い縄文時代に形成された。それは環太平洋とユーラシアに広がる言葉の一つであった。人々は土と太陽の恵みのもとで、大いなる自然との交感のもとに、言葉を形作っていった。紀元前十世紀にこの日本列島にやってきた弥生人は鉄器と稲田稲作の文明を持っていた。彼らは長く縄文人と共存しながら、原日本語の上に混成語としての弥生語を生み出していった。「もの」や「こと」や「とき」といった現在の日本語の基幹をなす言葉も弥生人の農耕文明が縄文の生命力と出会うことで形成された。五世紀頃にはすでに混成語としての日本語が成立していた。天皇家の祖先などは五世紀前後に大陸から亡命してきて列島を支配したにすぎない。

資本主義は発展過程で何度も何度も土と人の繋がりを断ち切る。断ち切ることによって搾取自由な労働力をつくり出す。それはまた農耕に土台をおいた文明からの断絶である。故郷は戦後世界のなかでどんどん変化し、世相は大きく変わった。高度経済成長は水俣の水銀汚染をはじめとする公害に至るのだが、同時に生活様式の変化が日本人の考え方を奥深くで変えた。例えば炊事が土間でするものから板の間でするものに変わったようなことが、決定的である。

私が住んでいた長屋にも竈があった。それが六〇年代から七〇年代一斉に洋風の台所に変わっていった。炊事と農耕文化の断絶が起こった。竈からガスや電気に変わるにせよ変わり方はあったはずだ。しかし実際のところ、土と食の繋がりを断ち切るかたちでこの変化が起こった。資本主義に他の方法は不可能だったということである。これは日本人の考え方にとって後戻りできない大きな変化だった。この時期を境に日本語もまた大きく形を変えた。意味の定まらない漢字訳語からさらに音訳洋語が氾濫しはじめる。土との断絶が言葉も変えていった。

日本近代はこのような断絶を繰り返してきた。明治革命自体が、国学の思想を裏切って成立した。明治政府は軍国主義に向かう過程で神社制度を通した人民の思想支配を企て、一九〇六年（明治三九年）の神社合祀令といわれる神社の整理統合を行い、その過程で多くの神社の取り壊しが行われた。全国で一九一四年（大正三年）までに約二十万社あった神社の七万社が取り壊された。単に神社の統廃合ではなく、古くから神社とともに伝わってきた固有の生活文化が断ち切られた。まことに深い断絶であった。それは幸徳秋水らを処刑した大逆事件と対をなすものであり、そのうえに日本軍国主義の大陸侵略が行われたのだ。

そして高度経済成長による断絶である。失われたものは何か。そしてそれは根こそぎ失われたのか。あるいはまだ掘り起こしうるのか。あるいは取り戻しうるのか。このように失われたものを記憶に残して人はこれからどう生きるのか。人が生きることとは何なのか。土との断絶の記憶は、逆に人の根元を問いかける。これは日本語世界にかぎることではない。人は再び甦るのだろうか。私はこの問いをかかえて生きてきた。

私は明治六年開校という菟道小学校を出た。二〇一三年の春、久々の同窓会があった。その事は「小学校の同窓会（二）」に書いた。

そして、京都学芸大附属桃山中学校を受験した。いまのように塾があるわけでもなく、ただ京都の街は小さい頃からの憧れでもあり、親の言うままに受けた。はじめは不合格であったが、しばらくして補欠合格が来た。当時の附属中学は高校がなく、高校のある私立中学に合格した人が、附属中学を辞退して、その分こちらに補欠がまわってきたのだ。

宇治から伏見の桃山に通い、それから高校は大阪学芸大附属高校の天王寺校舎にすすんだ。これも受けたら通ってしまった。当時、父が大阪心斎橋にあった本屋の丸善に勤めていたので、親が通えるなら，いけるだろうと受けたのだった。高校を大阪で過ごしたことは、大阪という街を知るうえで意味があったし、そこでの高校生活は、その後の土台となった。

その一方で、当時の私には、この親戚縁者のいっぱいいる古い宇治の町から出て行きたいという気持ちがあったこともまちがいない。少しずつ新しい世界に出て行くような気持ちであった。人はいちどはこうして故郷を出なければならない。そして長い道をたどって、故郷を見直す。そこに至る遍歴のはじまりでもあった。

後に書くように、一九七一年の秋、日記に「今、やっと自分が出発点にまで、戻ってきたのだという事を、しみじみ感じる。そしてこの出発点というのは、自分が幼い日に、無意識に、無邪気に、とり入れた、何かあるものと直接に継（繋）っているのだという気がする。」と書く経験をした。そして、そこからまた歩みはじめ、それをふまえて、二〇一八年三月に『神道新論』を表した。これはいわば、「幼い日に、無意識に、無邪気に、とり入れた、何かあるもの」を言葉にしようという試みであった。

父母の言葉

一族の祖先は近江商人だと聞かされてきた。江戸時代の後半に初代辻利兵衛が近江から宇治に来て茶菓子屋を開き、その長男である辻利右衛門が、江戸幕府の衰退とともに宇治茶が廃れてきていることを惜しんで、万延元年に茶問屋を開いた。曾祖父の与左衛門はその弟で、河

村家に養子となった。宇治の古い茶問屋は秀吉の時代から続いているなかで、辻一族は宇治では新しくやってきた者である。新しく来た者だけに進取の気があり、玉露の新しい製法と，運搬のための茶櫃の発明など，製茶技術の改良で大いに貢献した。その功労を顕彰されて銅像になって平等院の入り口に立っている。

母親は京都近郊の農家の人であった。京都の橘女学校を出て和裁の免許を持っていた。戦時中男手が足りないときに菟道小学校で代用教員をしていた。それで父を紹介する人がいて結婚した。小さい頃、内職に和服を縫っていたのを覚えている。一九八八年の秋に大腸の癌が発見され手術をしたが、結局翌年四月二十八日に死んだ。一九八九年一月から二月は、一時小康を得て家で療養していたが、そのころに、孫へ戦争中の思い出を書き残した。いろいろと手を加えて、別のノートに清書が数行ばかり書き始められていたが、そこで終っていた。

戦争のころの思い出

Tちゃんとお約束をしていた戦争の思い出、その時の兵隊さんや日本人の暮らしぶりについて私の記憶を少し書いてみます。

昭和十二年七月七日、蘆溝橋（ろこうきょう）事件が起こり、日中戦争が始まり、昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃で昭和天皇の宣戦布告があって太平洋戦争に入りました。

この時の私は女学生で京都まで通っていましたが、路面電車（市電）はガラスが割れていたりして冬は寒いでした。平安神宮や京都御所へ武運長久をお祈りによく行きました。卒業して昭和十七年四月から十九年三月まで宇治菟道（とどう）校の女子組を担任する先生でしたが、学校は男の先生はだんだん出征していかれて、五十人の中、男の先生は十人もいませんでした。町の中は若い男の人の姿がへっていって「もんぺ」をはいた女の人の働いている姿が今も目の前にちらつきます。戦争は今のような原子爆弾ではなく、機関銃とか鉄砲、戦車でした。召集令状といって「赤い紙」がきて何月何日集合と親が病気でも子供が小さくてもいやおうなしです。しかし戦場は中国とかフィリピンですから身近なこわさはありませんでした。私の組の子のお父さんも召集令状がきて、朝早く日の丸の小旗をもって駅まで送っていったのです。その時そのお父さんは涙を流して「子供をよろしくたのみます」と言って淋しく汽車の窓から手を振ってられた姿が、今でも目の底にやきついています。

しばらくすると役場（今の市役所）からお使いの人がこられて、「名誉の戦死です」と通知を持ってこられたのです。そこのおうちは三年生の女の子と一年生の男の子でしたが、お母さんが頑張ってこられ

て今はお米屋さんとして立派に暮らしておられます。

私の実家でも二番目の兄が三才と一才の女の子をおいて出征したのです。フィリピンへいく船が太平洋で撃沈されて戦死です。遺骨と言って白い布で包んだ箱が帰ってきましたが、中身は砂でした。

そのころの人々の暮らしぶりは、お米は配給、野菜は家で作れる人はよいほうで、お魚もお肉も忘れたころに配給でみんなひもじい思いでした。山で木の葉や木ぎれを拾ってきてお風呂をわかしている家もありました。それもできない家は何日もお風呂に入れず、石けんもだんだんなくなり、洗濯も遠のき、頭や体に「しらみ」という小さな虫がわいてかゆくて勉強もできないので、放課後頭の「しらみ」を取ってあげるのです。勉強のほうも兵隊さんの見送り、防空訓練、ストーブ用のまき運びと、みな戦地の「兵隊さんありがとう」という気持と、神国日本はかならず戦争に勝てると思って頑張りました。お昼のお弁当も「むぎこはん」「大根めし」はよいほうで「さつまいも」のふかしたのを持ってきている子もいました。どうしてもその日は持ってこられなかった子はお弁当の時間は外で遊んでいるのです。私はお弁当を持っていてもだれに食べさせてあげることもできず、食べない日もありました。上履き（ズック靴）は一カ月五足くらいクラスに割り当てがあるのですが、足と靴が合わない子は順番がなかなかこないのです。わらぞうりの子はよいほうで、はだしが多く、先生もはだしで頑張りました。放課後の掃除は校長先生が「心をみがく」と言われて、冬でも水でぞうきんをしぼり、光がでるまでふきました。

そのころの新聞やラジオでは、「どこどこ爆撃、敵機何機撃墜、敵艦撃沈」という喜ぶようなことばかりでしたが、ほんとうは日本に不利の形勢だったようです。

私は校長先生やK家のことをよく知った先生のすすめで三月でやめて昭和十九年五月十八日に結婚しました。おじいちゃんは京都の丸善という洋書の会社から舞鶴というところの軍需工場に行っていたので、宇治に三日いて、二十日に戻り、舞鶴で生活しました。ちょうど一カ月ぶりに宇治に里帰りしているところへ召集令状がきて、私はそれをもって舞鶴に戻りました。そしておじいちゃんは二カ月後に応召しました。舞鶴の家をかたづけてそれから宇治で生活です。おじいちゃんは中支へ送られたようでした。この時はおじいちゃんのおかあさんと生活しました。弟さんは中支へ出征中、もう一人の弟さん（大学生）は学徒動員で愛知県の知多半島の軍需工場へ行っていました。おじいちゃんのおかあさんは何でもよくできた人で、私は何でも教えてもらって失敗しては

「すみません」言っていました。そのころ人にたのまれて家で若い娘さんにお裁縫を教えました。宇治の工場へ二回ほど焼夷弾が落とされましたが、京都は古い都ですから爆撃だけはまぬがれました。

中支へ出征しているおじいちゃんや弟さんからはたまに葉書がきましたが、書いたときは元気でも、着くころはどうなっているのかと思うと不安の多いことでした。そして銃後の国民も兵隊さんに負けないようにと勤労奉仕、出征兵士の見送りと忙しい日々でした。もしも空襲があったらと、家の土間に防空壕をほってもらい、肩かけかばんを作って大切なものを入れ、綿の入った防空頭布を枕もとにおいてふだん着のままでねるのです。

戦局はだんだん日本に不利になり、敵が上陸してきたら竹やりでさしてやると言って家のかど口に立てかけてありました。軍部や政治家には分っていても、国民は勝てることを信じて不平不満を言わずに働いていました。そうこうしているうちに敵が上陸してくるとか、沖縄へ上陸とか色々なことが言われて出征兵士の家は二重の心配で大変でした。そうしていよいよ日本に敗戦の色がこくなってきたとき、ついに昭和二十年八月十五日、昭和天皇のお言葉で終戦となったのです。ラジオで天皇のお声を聞いて涙がとどめなく流れました。何の涙だったのか、くやしさ、やれやれ、おいじいちゃんや弟さんのことを思っていたのでしょう。

戦争には負けたが、その日の晩から電気がつけられたのが嬉しくて今でもよく覚えています。下の弟がみずぼらしい姿で帰って来ましたが、元気であることが何よりで、三人で白いご飯をたいて食べました（お米は裁縫を教えていたのでもらった分です）。それからの毎日はガラス戸の爆風よけの紙をめくり、家を開け放して掃除をしたりして忙しいことでした。日本の国の軍部や政治家の人はこれからが大変な日々が始まります。うちではおじいちゃんと弟さんがまだ帰ってきませんので、二人分の陰膳を供えて待ちました。

世間の人が食べ物に困ってられるので三人で大根めしも、さつまいも入りごはん、メリケン粉入りみそ汁も食べて、みんなの苦労を少しでもと味わっていました。

役場の人がおじいちゃんの部隊名を色々としらべて知らせてくれましたが、顔を見るまでは安心できませんでした。そうこうしているうちに、弟さんが昭和二十一年二月、おじいちゃんが二十一年六月五日にあかでよごれた軍服で帰ってきました。まだ河村の長男が中国の大連から引き揚げてないので、家中で無事を祈っていました。二十二年三月六日、長男一

家が十人で引き揚げてきました。大きな家があったのでよかったのですが十五人の食事の用意は大変でした。それからTちゃんのお父さんの生まれる日が近づいてきたので、別のところで住んでおじいちゃんと二人の生活がはじまりました。和裁を習いにくる人もだんだんふえて、おじいちゃんは元気で丸善へ勤め、まり子、るり子も大きくなって、今日になったのです。

昭和天皇が一月七日に亡くなられました。昭和の前半は戦争でした。私はKちゃんやTちゃんにそんな思いをさせたくないので、戦争といういまわしいことが二度と起こらないように、戦争反対の署名はどこでもしています。

今の日本は表面は豊かでありがたい国です。でもあまりもったいないことをしないでください。何時か食糧難の時が来ることがあるかもしれないことを心にきざんでおいてください。

今は健康に注意してお父さんお母さんの言うことをよくきいて頑張ってください。K兄ちゃんにも読んでもらってください。

これが両親であった。親は戦後働きに働いて子供を育てた。子供に自分たちが受けられなかった大学教育を受けさせることこともまた働く意味であった。そして私はとにかく京大で数学者を目指しているはずであった。私は後に述べるように結局は大学院を中退して高校教員になった。

私が教員になったのは、代用教員時代を懐かしそうに話していた母の影響があるかも知れない。親もまた、教員になることは理解してくれていた。

その息子が四十歳を目前にして高校教員を退職し左翼組織の専従になった。私のすることを、「大学でいろいろあった時代だったからなあ」といいながら、やはり理解しようとはしてくれていたと思う。しかし世間体やら、それになにより孫たちをちゃんと育てられるのか、ということでずいぶん気苦労をかけたことはまちがいない。

私が教員を辞めたことは宇治や京都に住む親戚には言っていなかった。母がこの孫への手記を書いたころ実家に見舞った折りに、親戚にいえばよいではないか、という私の言葉に対して、「共産党なんていえるかと癌が肺に転移して息苦しいなかではっきりといったことがある。

母が免疫力を弱め、癌を発病したり進行がはやかったのは、私にも責任がある。しかし、当時、こちらも必死で、母を思いやる余裕はなかった。今はただ手をあわせることしかできない。そして、母も父も亡くなってから、私は左翼活動から離れたのだ。

この歳になってようやくに母の気苦労を思いやることができる。人はこうして歳を重ね、そして土に還るもの

なのだ。つくづくとそれがわかる。

父親は京都の丸善に働いていた。父は幼年期を大連に過ごし小学校に上がる前後に日本に帰ってきていた。高等商業学校を卒業して大阪の市立商業、今日の大阪市立大学に推薦入学が決まっていたときに、その父に死なれ、進学の夢が断たれた。少しでも勉学に近いところと本屋に就職したのだ。以来定年まで徴兵の間をのぞいて丸善に働き、定年後は系列会社の役員になって終わった。その後は、本家の茶問屋を手伝い、また宇治の文化財愛護協会の世話をしていた。源氏物語宇治十帖ゆかりの場所に由来を記した板が立っていたが、それは父の字だった。筆の立つ人であった。私のしたいことについては、まったく好きなようにさせ、なにもいわなかった。

父は、母が亡くなってからおよそ二年後に肺癌で亡くなった。死ぬ直前の時期に自分の生い立ちを書き始めていた。ほんのはじめのところで終わったが、本家の支店の茶問屋があった大連の思い出を書き記している。

大連の思い出

幼き日の思い出、うすくらい北国の風景を思いだす、町並みは日本と違い赤煉瓦の家々で道幅は広くとつてある。それが大連である、大広場にある大山元帥の銅像とその背景にあるヤマトホテル、その横をとおって赤煉瓦の大連商業学校を経て幼稚園へ、大樹のある薄暗い園舎であつた。日本橋の下を南満州鉄道がとうり黒煙をはいていた。夜は五燭程の電気がともり、薄暗い町中を演歌師が演歌をうたいながら流していた。

大正十一年浪速町の家を馬車に乗り大連埠頭にきて船に乗り内地に帰る。ぶらじる丸で神戸につき宇治に帰る。宇治の町におり立ち五燭ぐらいの明るさの中にうかんでいた町をみてなんという田舎だと感じた。

蛇がおり関東大震災あい内地はこわいところだなあと思った。小学校に行く時、毛糸のジャケッにランドセル、革靴という格好は異色で、大半の子供は絣の着物に草履ばきであつた。卒業の時は男女組で今の進学コースであとはほとんど高等小学校へ進んだ、ＰＴＡにおべっかする塚本という先生と軍隊帰りのこわい尾崎先生ぐらいであまり良い印象は残つておらない。

京都市立実習商業学校に入学する、（一種三年、二種三年の六年制）今までと違い成績の悪い時は落第するとの事、事実クラスには二、三名落ちてきた者がいた。無我夢中に頑張つた。おかげで二年になり三年にあがる時二種の一年にジャンプ出来た。

満州事変が起こり、軍事教練が喧しくなる、配属将校は陸軍歩兵少佐で野外演習が盛んにおこなはれ

た。昭和九年室戸台風にあう。ふるい校舎が今にも倒れそうな暴風で下級生をつれ京都御所に避難する。向島の小学校が倒れ多数の犠牲者がでた。宇治橋も流され渡し船で通学することになつた。

いよいよ卒業の時がきた、主任の先生は進学か就職かをきいてきた、［昨年父が死んでいたので心配していたと、君ならば大阪商科大学の予科ならば無試験の推薦が出来る］と薦めてくれた。

世の中は所謂昭和恐慌の時代で大学はでたけれど就職が出来にくい時であつた。大連より帰つてた兄に進学の事を頼んだところにべもなくことはられた、このご時勢に、だめだと、誰におしえられたのかしらないが、詳しく話をきかないで帰っていつた。母親も憤慨していたが……。急遽予定を変更して卒業式の日副校長に就職の世話を頼んだ。幸いにして丸善と大沢商会の求人がきているからとのことで、卒業証書もつてたづねる。大沢商会は乙種卒業の人を求めているので駄目、丸善京都支店へ行き入社試験を受ける。英数国語の試験で難なくパスする。東京本社に送り決定するが明日からきてまらつても良いとのことで、以来四十余年の歳月をおくることになつた。

昭和十年四月丸善株式会社京都支店に正式に入社する。三条麩屋町の旧社屋である。京都大学、第三高等学校の先生達が多く、薄ぐらい洋書の売場に頑張つていた。昭和十一年二月二十二日、東京にて青年将校がクーデター。十二年七月七日、中国大陸蘆溝橋にて日中事変勃発全面戦争になる。

父は母が亡くなったときに、「仏さんのような人だった」といったのを覚えている。そういう夫婦であった。

京都にて

大学は京大の理学部であった。数学をやろうと決めた後は、京大理学部が当然の進路だった。こうして京都に通う生活がはじまった。

京都は母の生まれたところであり、私が学生時代を送ったところとなった。京都は、街が人を育てる都市である。この街で転換を経験し、人生を選び取って生き始めた。その準備の場として、京都という街には心から感謝している。

不安と求道

七〇年前後は世界的にも青年学生や労働者の運動が高揚した時期であった。当時多くの青年が闘争のなかで人生を真剣に考え、少数の者が燃焼しつくし、多くの者が内にいろんな問題をかかえつつ現実と妥協し、その内のまた少しの者がねばり強くなし得ることをしてきた。自分などは当時の闘争に遅れて参加し、黙って人生を少し変えたひとりにすぎない。

あの時代を数学科の大学・大学院生として過ごした。しかし実際のところ数学者であったことはなかった。若いときからよく、何をしているときにも不意に存在の不安とよぶほかない不思議な感覚におそわれる瞬間があった。その意識がおそうと、たちまちそのときしていることが無意味なことに思えるのだ。だから中学・高校の頃に上昇志向を一方でもって数学を志したが、それに没頭してしまうことのできないものをかかえていた。

このような意識をかかえて、私は日本の宗教者とりわけ道元に強くひかれてきた。高校生から大学初年のころ『正法眼蔵』を持ち歩いて読んでいた。そのときいちばんよくわかったのは，道元の「非情の求道」の姿勢だった。いざというときにこの道元の姿勢が自分のものごとを考え決断するときの姿勢を規定してきたように思う。学生時代には自分なりに道元の非情の求道を歩もうとした。

道元にひかれたのは故郷宇治にある興聖寺の存在が大きい。興聖寺は宇治川東岸の山塊の麓にあり、道元を開祖とする曹洞宗の寺だ。もとは一二三六年に道元ゆかりの伏見深草に建てられたが途中で廃絶。一六四九年、淀城主の永井尚政によって現在の場所に再興された。ここは小さい頃からの遊び場所であり、また興聖寺の祖師堂のまえの石段は高校生の頃から考えごとをする場所だった。

二回生になった一九六七年五月、大学で臨済宗京都相

国寺の在家居士の会である智勝会を知り，相国寺僧堂の故梶谷宗忍老師に参禅、相国寺専門道場の僧堂で禅の修行を始めた。その夏には播州赤穂の興福寺で合宿もおこなった。合宿を終えた感想を十月に書き、智勝会の会誌『智勝』第一集（昭和四十三年四月）に寄稿もしていた。

日曜ごとに雲水とともに参禅、赤穂の寺での合宿では朝から晩まで座禅に明け暮れた。釈迦が成道したのは十二月八日と伝えられ、それを記念して僧堂では十二月一日から八日の朝まで、昼夜坐禅する臘八の接心会が行われる。相国寺の臘八の接心にも参加させてもらった。座禅するときは足に負担がかからないように学生ズボンだけである。ズボン下のたぐいは身につけない。早朝まだあけぬ時刻に僧堂で三拝すると寒さに足が大きく震える。しかしそのまま坐にはいり、呼吸を整えていくと震えはおさまり寒さを感じなくなる。

禅の呼吸法、精神と肉体を統一的に統括することなど、これをこの時に体にたたき込んだことは私の大きな財産となった。学生は最終の日だけ徹夜したように思い出すが、厳冬の僧堂で夜通し座禅をし朝をむかえたことなども忘れがたい。

また老師は参禅の後におこなう講話である提唱を『正法眼蔵』をもとにおこなっていた。相国寺の僧堂の奥の東屋での提唱の時間は、長い歴史の中で継続されてきた営みの蓄積を感じさせたし、別の時間がそこには流れていた。そのこと自体は確かだった。

道元は私の愛読書であった。わからなかった。しかしにもかかわらずあれだけ熱心に『正法眼蔵』を読んだのは、道元の求道者としての厳しさに強くひかれたからであった。非情の求道精神、この厳しさに惹かれ続けた。今も変わらない。存在の不安に立ち止まるのではなく、「この世界は存在しない。すべては空である」と否定し続ける、否定して否定する、心は仏教から学んだ。その能動的な否定の行き着く果てに顕れる世界を垣間見ながら、今日まで来た。

老師は「筋がいい。期待している」といってくれた。臨済宗の禅の修行は、座禅と老師の提起する宗教上の問いを受けとめ問答を通して一段一段自己を高めていく。一年余り修行したときにも、自分自身の境涯の低さを知っていたし、問答が形式に流れていることも承知していた。老師がそれを見破り、喝破し自己を引き上げることを望んでいた。しかし、老師はそのまま私に一つの段階を許し、無字の公案から隻手の音声の公案に進ませた。何かおかしいという感慨が残った。

生意気であり若気の至りであったが、当時次のような思いをいだいた。当時の覚え書きである。第一に、ここで行われていることは真理なのか。その問答（つまりはその宗派の基本的日常活動）は形式に流れ形骸化していないか。第二に、偉大な宗教者の自己の生命をなげうっ

ても真理を求め真理に生きようとした、その求道精神を今日の場で継承しなければならない。そうなっているか。第三に、真理は自己の現実を変革するはずである。自己の変革とは自己の存在するこの世界の変革と一体である。真理はやはり世をかえる実践のなかで追求されねばならないのではないか。それが本当の菩薩道ではないか。

ほんとうはこれは自分の問題だった。ここには自己の内からの求道の切実さが欠落している。現実の禅がどのようなものであるかという以前に、内部に切実さがあれば、疑問を師にぶつけるなり、別の師を求めるなりさらに進む方向があった。何を問うているのか、何が本当のところ自分の問題であるのか、私自身にわかっていなかった。問題を外部においたままである。問題を一度でも外においてしまえば、既成仏教の諸問題や堕落の諸相が目につくのは当然である。真理は外にはない。相国寺の仏教に真理がないという以前に、自己の求道の切実さを問うべきであった。当時はそれが問えないところに自分の限界があったのだ。

六八年の学園闘争、全学ストライキのなかで寺から離れた。そのとき未練はなかった。ただこのことを老師にぶつけないままに寺を離れた。これが自分の未熟なところだった。どうして思いの丈を老師にぶつけなかったのか。自分のなかにやはり禅を心理主義的にとらえ、神秘体験を求めるところがあり、自分を捨てることができなかったのだ。梶谷宗忍老師はもうおられない。未解決の課題として残ってしまった。とはいえ、またわずかな期間のこととなったが、この相国寺禅堂での経験は生涯のものとなった。

追記。2012年7月14日、智勝会のOB会に出席。僧堂との再会を果たした。その日の日記である。

数学と孤独

学生時代、私は現代日本語の人の言葉としての荒廃というものを強く感じていた。この荒廃の現実の前には、荒廃を自覚してとらえないどのような文化的な仕事にも打ち込めないようにも思った。私は大学の数学科に籍は置いていたが、このような荒廃した日本の現実の下で数学をして何の意味もないと思われた。客観的に若い自分をふりかえれば、ここには自分の数学的な才能の無さをこのように考えることで補おうとしていた側面がある。イソップ物語の『キツネとブドウ』である。私自身に数学の才はなく、すべてを捨てても数学をやるというだけのものを内部に持てなかったということが一方にある。だが他方、日本の大学で数学者であろうとすれば、現実との関係をどこかで断ち切らなければ不可能だった。

そもそもなぜ大学は数学科を選んだのか。高校時代は数学と日本語だけしか得意なものはなかった。日本語が

得意といっても、学科のうえではただ一度言葉の用法に関するテストで飛び抜けた点数を出して教師を驚かした以外には何もなかった。哲学書を乱読した。高校二年の時にラッセルの『西洋哲学史』を学校の図書室から借りっぱなしで没頭したのを覚えている。しかし、西欧社会科学に対しては、最後には見ている自分が対象から抜け落ちてしまうではないかという基本的な感覚があって自分の思想とはならなかった。それを実践で越えるというには、まだ余りにも実践への必然性に乏しかった。小ブルジョア知識人になりかけのものとして、数学で自由を得たいという考えから数学科に進んだのだった。西欧数学の土台にあるギリシア哲学に強く惹かれた。数学を学の柱とする哲学が日本の大学にあれば、その方に進んでいた。しかし日本の大学の哲学は「文系」であり、それはやはりまやかしであり、直接数学をするしかなかった。本当は理学としての哲学をやりたかった。しかしそういう学問分野は日本の大学にはなかった。真の自由を得んとして数学をやるのだと考えていた。

こうして大学生になったが、六六年から七〇年の大学闘争のときには単なる一般学生であったに過ぎない。私は、自分と世界の関係を自己と自然の関係ではとらえても、それ以上ではなく、一般的な政治性のない社会意識の乏しい学生に過ぎなかった。とりあえずは数学と禅にしか目は向いていなかった。一九六六年十月二十一日、総評を中心とした五十四の単位労働組合がベトナム戦争反対、アメリカ帝国主義のベトナム侵略に反対して統一ストライキを実施した。このときは、学生の集会の末尾について参加したが、それ以上に自ら何かをすることはなかった。学生のあいだ私は結局は運動の同伴者に過ぎなかった。

一九六七年十月八日の羽田での佐藤首相南ベトナム訪問阻止闘争で、私の一年下の工学部学生山崎博昭が殺されたとき、学内の雰囲気は一変した。佐藤首相の南ベトナム訪問を阻止するため中核派、社学同、解放派からなる三派全学連を中心とする部隊は羽田周辺に集結。はじめてヘルメットと角材で武装した。社学同、解放派部隊九百人は鈴ケ森ランプから高速道路上を進み、六〇年安保闘争以来はじめて機動隊の阻止線を撃破し実力で突破した。さらに空港に通じる穴守橋上を固める機動隊と激しく衝突、橋をふさぐようにおかれた七台の警備車に放火するなど現場は大混乱となった。また、千人の中核派部隊は弁天橋に進んだ。迎え撃った機動隊を撃破し、激しい放水の中、弁天橋上で警備車を奪うなど激しい乱闘を繰り返した。この闘いで中核派の京大生山崎博昭が死亡、重軽傷者六百人あまり、逮捕者五十人が出た。街頭での反体制運動で死者が出たのは、六〇年安保闘争時の樺美智子以来のことであった。

この日から一般的な学生の意識は一変した。社会的に

もに多大の衝撃を与え、同時に警察力に押え込まれ沈滞していた学生運動が再び高揚する契機となった。大義は学生の側にあった。大義のある実力闘争がいかに大衆の心に火をつけ、学内の雰囲気を一変させ、問題を根元的に考え、生きることをさせるか、ということを知った。歴史の力というものをつくづくと感じる。その土台には、ベトナムにおける民族解放闘争があった。戦後世界における超大国アメリカの覇権をうち破り、今日に至る資本主義の混迷の始まりとなったベトナム民族解放闘争、この力が、日本の青年の心に火をつけ、その実力闘争が、私のような一般の無党派学生の心にも火をつけた。問題を根本的に考えるということ、時代がそのように学生を駆り立てていた。

全共闘運動が大学内に及び、大学での学問というものを問題にし始めたのは、一九七九年一月十八、十九日の東大安田講堂攻防戦の後であった。一月二十四日に法経一番の大教室でおこなわれた奥田総長との大衆団交のときに京大全共闘が出した、東大全共闘代表・山本義隆の名によるアジビラが今も手元にあるが、実際あの闘いのころから足下から問題を考えるようになった。だが、大学の全体はちがっていた。一月二十一日、大学は、この日正午、学生による封鎖がおこなわれていた学生部で開かれる予定であった決起集会に参加しようとした他大学の学生の学内立ち入りを禁止し、「京大を京大人の手で守る」という名分のもとに教官、職員、院生、学生、生協職員の手で正門にバリケードを築いた。「東京で闘った活動家が大挙京都に来る、外人部隊から京大を守れ」ということで、いわゆる民青や多くの一般学生らが、逆にバリケードを築いた。私もデモで中に入ろうとして放水されたが、そのとき「お前が」と私でさえ驚くほど学園問題に関係ないという態度であったものまでが、逆バリケードのなかにいた。彼らは三高寮歌を歌っていた。嫌いな歌ではなかったが、三高寮歌があのように大学の既成の体系を守ろうとしたものによって歌われてからは、もう歌ったことはない。あのとき逆にバリケードを築いて「京大を守れ」と行動したものは、明治以来の国家とともにあった京都帝大を守ろうとしたのだ。

私は当時なんとも悲しい気がしたことを覚えている。私があの学園闘争が問題にしたことを本当に自分の問題としてとらえたのは、もっと時間が必要だった。まだ自分の内部から近代日本の大学の学問を対象化することはできていなかった。しかしとにかく、ここでおこなわれている「学問」が「学」ではないことを直感的につかませる最高の反面教師だった。

本当にその意味を理解しはじめたときにはすでに闘争は高揚期をはるかに終えていた。七〇年を境に七〇年闘争の高揚は退潮した。そのとき、ほんの少しのものが腹を固め人生を変え、地域や生産点の活動家としての道を

歩み始めていた。心優しくしかも豊かな感受性のあるものは大学に残らなかった。

もちろん私もまだ生き方が定まらず大学院に潜り込んだのであるから、時間を稼いだにすぎないのだが、とにかくいつのまにか誰も京都からいなくなった。大学は正常化され何もなかったようにあるものは学者を目指し、あるものは大企業に就職していった。

私も今はそれなりの自分の経験もふまえて、それぞれの人生の選択を認めることができる。が、当時はこれは何だと思うことが少なくなかった。立派なことを言っていたものがいつの間にかいなくなり、たとえばあとで聞けば外国に留学、帰ってからは大学で働いていた、といった輩ばかりであった。あるいはまた、寮にいたときはいっぱしの活動家であったが、卒業と同時に当時脚光を浴びつつあった電算機の会社に就職していったというものもいた。

ほとんどのものは実は人生を変えなかったのだ。今に至るも当時の志をもって実際に生きているものは少ない。少ないけれどもいる。大学をやめるかどうかとか、それまでの人生を変えるとかいうが、それは要するに小知識人の問題に過ぎない。ただ七〇年闘争のなかでは、もっとも良心的で誠実でまた行動力のあるものが、それまでの大学体制を前提に考えていた自分の人生を変えたのは事実である。理念をもち学問的にも優れたものほど、このときに大学を離れた。そのことは近代日本国の大学の学問体制が、創造性があり学問をきり拓いていく可能性のあるものを結集することができなくなったことを意味している。

青年のなかでもっとも良心的なものを結集し得なくなったということは、その体制、つまり大きくは近代日本であり、小さくは戦後体制であるが、これが後退過程に入ったことを意味する。六八～七〇年闘争はその画期となった。六〇年安保闘争では、知識人は知識人として闘いまた知識人に帰っていったが、七〇年はそうではなかった。これが欧州やアメリカ、そして日本などで同時期に起こったということは、奴隷貿易以来の西洋文明が再び転換する時代に入ったということであり、その端緒となったということである。四〇年を経てそれは現実のものとなりつつある。

多くの人がこのなかでどのように生きるのか悩んだ。私にもいろんな友人がいた。今にして思えばもっと色々話せば良かったということも多くある。身近にいた人の悩みをなにも聞いてやれないまま永別した苦い思い出もある。私を含めて当時はみな自分のことで精一杯であった。

一九七一年三月、宇治を離れ京都北白川に住む。比叡山の麓にある深い木立の瓜生山も近い白川女の里であった。家を出て、故郷で試行錯誤したすえに行き詰まった自分を考えなおし、もういちどやり直そうとした。京都

北白川に下宿して改めて日本における数学というものを考えた。

数学の真髄はギリシアの精神である。シモーヌ・ベイユが地中海文明について考察している文書のなかにあるギリシア精神の輝きに、あの当時強く惹かれた。地中海文明はアフリカ、アジア、ヨーロッパの混成文明である。ギリシア文明が西欧文明の起源というのは近代ヨーロッパが作った虚構である。ベイユがその文書のなかで指摘し、またハイデッガーが指摘するように、後期ギリシア思想は大きく変転した。当初のギリシアの混成文明の輝きから、二元的世界観にうつり西欧物質文明を準備した。その辺りのことはまだ分かっていなかった。私にとってギリシアはただただ輝く精神であった。少なくとも内部からの必然で発展してきた文化を土台とする文明が西欧にあり、数学もまたその文化とともに内部から発展してきているがゆえに、の文化として人生に意味を与える力を持っていると思われた。

日本を見るに、日本の現実の数学はまったく文化の根を持っていなかった。「文化の根」ということが、人が生きるうえで人生に意味を与える土台にあるものと思われた。そのことに気づいた者は数学のみに没頭することはできず、日本では数学者たりえない。日本の数学者は数学の社会的における存在意義には目をつむり、自己を文化の土台から切り離して西欧に直結させないかぎり、存続し得ない。

例外は岡潔だった。日本の数学者にして普遍的な数学をうち立てていた。その数学は彼の世界のなかでは確かに根をもっていた。だがその世界は余りにも高く、遠かった。彼の日本文化に対する発言は情緒の流れとして理解できた。高校三年生の秋に読んだ小林秀雄との対談『人間の建設』以来、岡潔の直感は私の内部と響きあうものがあったし、強く惹きつけられもした。しかし、その発言が世の中ではたす客観的な役割は危険だった。賛成はできなかった。

そのようななかで、多くの数学書を読みあさった。しかし打ち込むことは出来なかった。生の数学に直面することもほとんど出来なかった。今この年代になって省みれば、あれほど多くの時間を費やしながら、なぜもっと数学そのものに触れようとしなかったのか。

自分自身が直面していた「日本語を固有の言葉とするものが数学をする意味はあるのか。技術の基礎としての数学はあり得ても、人が生きる文化の背骨としての数学は、非西洋ではあり得ないのではないのか」という問題が、実は学園闘争が問題にしていたことそのものであり、さらにその土台にあるのは近代日本の矛盾そのものであることが見えてきた。

今から考えれば、自分の数学の才能の無さに対し、問題をこのように一般化することで乗りこえようとしてい

たとも言える。それはまちがいない。一方、その結果、数学の存在を考える視点が深まっていったとも言える。これは問題の二つの側面だ。いずれにせよ、たとえどのように問題を大きくとらえようと、出口なしの壁であることには変わりなかった。

ひとり心を研ぎ澄まし考えていた。自分なりに数学に決着をつけようと自分で選んだ主題に沿っていろいろとやっていた。同時に毎日毎日日記を書き、下宿のまわりを歩いていた。円空には失われた竈のにおいがあった。ほの暗い竈の上の棚の上で微笑んでいるように感じた。彼も黙って山河を遍歴し彫刻を残していったのだ。何日も誰とも話しもしないということもあった。夏が過ぎ数学の試みは何も結果が出ないままに区切りをつけていた。我流で何かができることはなかった。数学の問題には向きあえないままであった。指導者に出会わなかったとか、そのような理由は外因論である。当時の自分には、本当のところ数学に出会うだけの力がなかったのだ。

自分なりに数学に出会うには、数学教育の経験を経なければならなかった。

転換と自立

一九七一年の夏が終わり秋の気配がして、感覚が鋭くなったころ、転換を経験する。それは京都北白川の風土の中で起こった。

九月二十八日の夕方小一時間、北白川の天神宮を歩いた。そのころ考えごとに疲れるといつも北白川の下宿の辺りを歩いていた。如意ケ岳、俗にいう大文字山、つまり八月十六日の送り火で左大文字が浮かぶ山の麓に下宿はあった。古い地元の農家の二階だった。とにかく当時誰とも一日ものをいわないような日が続いていた。

まったく数学にゆきづまっていた。夏中自分で考えた方向でいろいろやってみたが何の結果も得られなかった。心だけは集中していたが、壁にぶつかっていた。すべてが袋小路であった。

一方、大学を去るものは去って新しい人生を追求し始めていた。私の高校時代からの友人が当時大学を離れて空港反対運動のために淡路島に移り住んでいた。自分が遅れてしまったという意識もまた切実であった。それは今から思えば小知識人の焦りにすぎないものであったが、若い私には十分深刻であった。

■九月二十八日

夕方小一時間、天神宮を歩く。台風が過ぎていった今日は、秋晴れである。西の方に傾きかけた陽の光が、深い木立の間を通して、この岡のあちこちに安置された祠

を照す。天神宮は、小さな岡全体を境内としているのだ。その岡のふもとを、白川が流れている。長い石段を登ると、本殿や、おそらく深い由緒があると思われるあまり大きくない社や、口を清めるための水を湧き出させている石で作った手洗所とそれを守る屋根などが、目に付く。少し向うには稲荷神社の赤色の、狐を両側に添えた建物もある。もっと目立たぬ、小さな祠、もう屋根もずいぶんゆるんでしまって、あまり人も、物を供えたりはしないようなものが、二つ三つと散らばってある。

そのうちの一つの前に立ってそれに見入る。西の方を向いていて、ちょうど木々を通してきた光が、不思議な明るい空間を作っていた。誰もいない。どのような縁でこの祠が建てられたのか。それが何時の頃であるのか、何も知ることはできない。そこに、そうして陽の光があたり、そして生れたその場所。それに見入る自分には、何故か、それがはじめて見るのではない、いつかも確かに見た事があるものなのだという思いが起こる。確かに、この、古い建物に静かに陽が照って生まれる空間は、はじめてなのではない。生れてこの方、この風土のなかで育った者が、折にふれ、いろんな機会に、何回ともなく見てきたものに違いないのだ。一々思い出す事もない程に、見てきたのだ。

この世界は何の世界なのだろうか。

もう一つの、いつも天神で心に染みる風光、それは陽のあたる木々が風に揺られ、静かな、音と光の世界を作るなかにひっそりとある、あの口清めの場所のただずまいだ。その様々の要素が織りなしつつ、一つの空間をかもし出すのだ。何れの風光も生きている。まわりの木立や、風光や、陽光と切り離してあるのではないのだ。それら天然のなかに、確かに人工のものが置かれているのに、そこに人間の計らいが働いているとは感じられないのだ。

これはどういう事だろうか。作った人には、人が作るという思いすらなく、彼は、当然の事の様に、人と自然の垣根を取り除いていたに違いない。常に彼がそうであったかどうか知る事はできない。けれどあの建物を作る作業に、その職人としての技能の全てを注いでいた時、彼は確かに天然と一つであったのだ。再び、それはどう言う事なのだろうか。もはや如何に想像を働かせても、想像によっては、決して原理的に知る事のできぬ事だ。

何時も、心に何か動かぬ深いものを生れさせる風光には、陽の光がある。それは特徴だ。もう一つは生の自然ではなく、生の自然と溶けあった、人の手になるものがあるという事、それは第二の特徴だ。さらにその感動は、その風光自体に因るというよりは、何かその風光に感応したと言うか、そのような心の動きによっている。じっと思いを潜めて、その風光に見入る時、頭のどこか高い所から、さっと、ある懐かしい感情が広がる。それがそ

の風光に更に深さを与え、そして、ある充足感が残ってほっと我に返る。何時もこんな風なのだ。

三度これは何なのだろうか。この世界は、何処へいくのだろうか。懐かしさと、悲しさは、同じ事の両面という気がする。その同じ事とは、何なのだろうか。全てこれからという気がする。

■九月二十九日

昼食の後少し、また天神宮までゆく。今日も、時々雲にかくれるけれど、日が照っている。長い曲った石段の下の方の横の所に座って、上の方を見る。石段を登りつめたところに、社の上半分程が見える。両側は、立木の繁み、そして残ったところは青空と雲だ。昼下がりの静けさの中で、虫の音が、その静けさを一層切実にしている。

この風光の中には、深い、透き通った、人間的な、何かがあるのだ。その何かに、限りない懐かしさを感じるのだ。これは一体何なのだろうか。道元の世界は、或いはその何かに答えているのかも知れない。けれど、今はそれはわからない。確かに識ることのできる時まで、わからぬ事は、わからぬ事として、保持してゆかねばならない。

一切の神秘主義的傾向を、退けねばならない。自分の内の何が、そもそも懐かしさを感じているのだろうか。何が懐かしいのであろうか。何が何に感じているのか。こう書いている、私は誰だ。

■同日夕刻

今、やっと自分が出発点にまで、戻ってきたのだという事を、しみじみ感じる。そしてこの出発点というのは、自分が幼い日に、無意識に、無邪気に、とり入れた、何かあるものと直接に継（繋）っているのだという気がする。

その何かあるもの。それを言葉にすることは難しい。何処からとりいれたのか、と言われれば、幼い日の回りにいた人々、そして自然の環境によって作り出されるある精神の状態としか言えない。その精神の状態を何処に定着させていったのか、と言われれば、心と答えるより他はない。

とにかくそれは懐かしいのだ。日のあたる古い建物の作る静かな空間に、心を動かすのも、ずっとたどってゆけば、まだ六才の頃にまでたどりつける。あのころ西の方を裏とする、宇治川に面したところに住んでいた。けれども六才以前に具体的な思い出は出てこない。あの以前のところこそ、けれど、より本質的であるように思える。

今はただ、この出発点にまで戻ってきた自分を注意深く、静かに、確固としたものとし、そして、ゆっくり、出てゆかなければならない。世俗のあらゆる事にも、或いは学問でさえ、その深い歩みとは、直接の関係はないのだ。自己を、そのように鍛えねばならない。その直接の関係ないものを、けれども一つ一つ試練として、またその深い歩みをより確かなものとするための機会として、誠

実に受入れてゆこう。

日記以上。

これは不思議な経験であった。自分というものがはじめて既成の価値観から解き放たれたようでもあった。ここからすべてをはじめから考えていこうとする土台にぶちあたったような気持ちであった。自分の計らいではなかった。

北白川天神宮のなかにおかれた小さな祠にはいったい何が祭られていたのだろう。あるいはあの天神宮の小山の森の空間のなかには、神社合祀令によって取り壊されたまつろわぬ神、つまりは近代日本の歩みのなかで殺されうち捨てられた人民のこころが息づいていたのかも知れない。それが私に働きかけたのかも知れない。そういうことに自分の内が感応したのかも知れない。あの時間のなかで、自己の土台に触れた。そのとき人そのもの立ち返って歩み出せという促しを感じ取った。あれは転換であった。

秋の転換を経て、大晦日に宇治に帰った。晦日の夜半、一人宇治の街を歩いた。県神社から平等院の裏門前を通り、宇治川に出る。川の中之島を通って対岸にわたる。宇治神社の下に、御輿を清めるところだろうか、川べりに朱の門が立っている。そこに立って空を見る。月は雲にかかり、天下を照していた。さらに宇治上神社の方から小さい頃に住んでいた辺りまで足をのばした。家々は、年越しのたつきの音がしていた。月に照らされひとり歩いた。このとき何か決意した。私は自分自身の内部に普遍的な人の真実をめざす立場がうち立ったように思われた。

自分には自分で考えていたような数学の才はなかった。このことをおさえて、そのうえで自分が直面した問題を正面にすえて生き、そして考えていこう。数学には途が見いだせなかったが、壁に当たってはじめて転換を経験し、新しい道へ踏み出していくことができた。

それから二年間いろいろ模索が続いた。最後の一年は大学を出て働くために教員免許を取ろうと、そのためにだけ大学院に籍を置いていた。

京都を出る

その後、大学院をあと一年残したところで中退した。やめるときに、一九六九年三月二日付けの「朝日ジャーナル」の山本義隆さんの『攻撃的知性の復権』を取り出して読んだ。

ぼく自身が、真に大学の腐敗の根源を部分的にもつきとめるのには数年間の東大内での、学生としての、研究者としての生活が必要であった。また闘いが外面化されるには羽田以降の学生運動が不可欠であった。…ぼくも、自己否定に自己否定を重ねて最後にただの人間—自覚した人間になって、その後あ

らためてやはり一物理学徒として生きてゆきたいと思う。

学部学生のときには大学闘争の内在的な意義はわからなかった。私の世代は研究者として自己を形成する手前で闘争の渦中に飲み込まれた。山本さんの世代は、その後「何々として」と、そこに自分の専門分野をおくことができた。私の世代はそのような専門をもつ前に、大学を離れた。自己否定の果てに「物理学徒として」がある山本さんの世代とは違った。われわれの世代は、いわば「人として」という他なかった。それこそ思想と哲学の生まれる根元的な場で、方向転換しなければならなかった。

七〇闘争の最終的な終わりを告げた連合赤軍の崩壊をみながら、だからこそやってみようと考えた。それはまだ自分が本当のところぎりぎりの闘いをしてはいなかったからそのように思ったともいえる。連赤の問題はまだどこか人ごとだったのだ。それは確かにそうだ。

一方、自分の内部にあった求道の基本姿勢は、あれだけの事実にもかかわらず、揺らがなかったともいえる。自分の内部でとらえた七〇年闘争の意義は、連赤の崩壊で崩れるようなものではなかった。革命運動のなかで文化を再生する、問題をこのようにとらえ始めていた。問題の出発が文化主義的であって、脆弱なものであったことも事実だ。文化の中に現実の亀裂を予兆として発見して自己を変革することは、知識人の生き方としては普遍的であるが、しかし基盤は弱い。最後までやりきるものはすくない。

全共闘運動は言葉の本当の意味で革命運動だった。現代の革命というものの初歩的な実践だった。それが幼く初歩的なものであることをもって、その意味を軽視するものわかりのよい同世代が多くいる。しかしあれはやはり革命であったし、革命であるがゆえに私のような一般の非政治的な人までが、人と自己の人生を根本的に考え人生を変革し、そうすることでこの革命の一翼であろうとした。革命ととらえたものにとってそれはまさに革命だった。全学共闘会議は、大学を一時力で支配していた。力の裏付けは怒りであり、腐敗したものを暴く大義であった。全学共闘会議は大学に出現したソビエトだった。一大衆としてそのもとにあった者としてこのことは明確にしておかなければならない。大学を支配する人民権力、その力が私のように遅れた意識の一般学生にも人生を真剣に考えることを強いたのであり、この内部に革命を起こしたのである。

六〇年代末の資本主義諸国での青年の闘争は、根本的に考え根本的に生きようとする国家権力との非妥協の闘いであった。近代の制度から自由に新しい時代の生き方を作り出そうとする文化革命を内包していた。それはまた中国文化大革命やベトナム民族解放闘争に励まされたものでもあった。

資本主義発展途上の学問は方法であり手段であった。大学や高校で高揚した学園闘争は、青年学生が日本の近代大学でおこなわれる学問のこのような根本的な欺瞞性を正面から暴露した闘いだった。それに代わりうる内実は作り出せないままに抑えられたとはいえ、その問題提起はいまも新しい。

全学共闘会議は、この大義のもとに学内を支配した学生の権力であり、戦後革命期の生産管理闘争における職場評議会以来の学園ソビエトだった。権力をめざさないというものもいた。にもかかわらずそれは力であり、力であったがゆえに私もまたかえられたのである。

このように考えふりかえってみると、やはり故郷の構造に思わぬ形で、あるいは無意識の層をとおして、深く影響されていることを認めなければならない。

京都北白川の経験は、人の真実ということの経験だった。幼年時代を無意識ではあるが自然との深い交流の中で育ち、中学高校とどこかで近代日本のとりわけ高度経済成長の思想に侵されていくことによって真実の自己を見失ったものが、原則的に真理に忠実に生きることを教えた六〇年代末の経験を経ることによって、矛盾を避けずに見据えようとしたとき、懐かしい呼びかけに出会ったのだ。

原初的な人と自然の交感とそれを土台にした人の生き様という点から見れば、現代日本は内部が決定的に崩壊している社会であった。日本は西欧帝国主義の圧力のもとで近代資本主義に入り、日本社会の底辺を順次解体してきた。高度経済成長はその解体の仕上げであった。六〇年代末の闘争は本質的にこの資本主義に対する闘争であった。であるがゆえに北白川での経験はこの闘争の内実と一体であった。

だが私にとってすべては未熟であり、問題の緒についたばかりであり、この内実を豊かにするためには旅に出なければならなかった。旅に出てその運動と闘争のなかで失われた人の生き様としての文化を回復し、さらにその土台として私が学んできた宗教を新しい人の内実として再生させたいと考えた。

大学院の修士課程を終えたとき、数学研究者への道を離れることを決めた。博士課程に籍を置きながら、教員免許に必要な単位取得に講義を聴き、教育実習もした。そして、街に出て、京都のベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）などに加わった。そこで知りあった人のつてで、兵庫県で公立高校教員の仕事を見つけ、京都を離れた。

平安時代末期、道元は比叡山を降りて新たな求道の旅に出た。それをまねて、自分の行動を山を降りることだと考えていた。そのように考えたこと自体、若気の至りであったけれども。人は人生にゆきづまったときに、風土の内に圧殺されたものの息吹を感じ、そこから立ちあ

がる力を得る。日本列島の土、深い樹木の奥、こけむした巌、木漏れ日のあたる場、そこにまつろわぬ神の息吹を感得する。これが京都北白川の経験であった。

教員時代

大学での生活を終え仕事に就いた。教員免許をとり大学院を中退して兵庫県で教員になった。労働者になってからいくつもの闘いと運動に携わった。私の働いた地域では、水平社運動、部落解放運動と教育闘争、勤評闘争、また綴り方運動などの歴史のうえに、六〇年代後半の世界的な青年運動の高揚を受け、中学生や高校生の教育権を打ち立てようとする闘いが広がっていた。その渦中に飛び込んだ。解放教育運動のなかで、障害者の高校教育を創造する仕事と、日教組の分会として地域の教育労働運動を手がけた。それと平行して、左翼党派の活動をはじめていた。

数学教師

一七九三年秋、はじめて教壇に立ったとき何かおかしいことに気づいた。クラスの何人かが分数の計算ができないのだ。それに気づいてすぐに分数計算も授業でやろうとした。今度はできる側の生徒たちから反発を受けた。分かりきったことに時間をさかずに先に進んでくれ、というわけである。悩んだ。

夢中で試行錯誤するなかで、ある日、できる側の生徒に聞いてみた。「君らは分数計算なんか簡単だというが、ではなぜ分数のかけ算は分母と分母、分子と分子を掛け合わせればいいのか、わり算は分母と分子、分子と分母を掛けるのか、説明できるのか」。答えられるものはいなかった。そこで私ははじめにたち返って、量というもの、量を量ること、連続量をとらえることと分数の定義、単位の誕生、連続量の和と差、一あたり量と積の定義、商の意味、とすすんで、初めて分数の積と商の計算法に入った。分数のできるものもできないものも、皆はじめての話ばかりで、よく聞いてくれた。わかった子供のにっこりとした笑顔が忘れられない。はじめてクラスの集団としての授業がなりたった。

追記：このときはいわゆる「水道方式」によった。この経験を見直し、その意味と課題を明らかにしたいと考えながらなかなかできなかった。ようやく、二〇一三年の初頭、「量と数」にまとめることができた。

読み書き算術から切り捨てられたまま小学校、中学校を送ってきた生徒が、教育要求闘争の結果実現した制度にのって高校に来ていた。私の知らない世界であった。しかしとにかく、その生徒らを含むクラスで数学の授業を

した。試行錯誤のなかでつかんだことは、どんな生徒もわかりたいという要求をもっており、「わかる」ということは人の根元的な喜びであり、わかることを実現していくことが、生徒の心に灯をともしていくことだ、ということであった。ひとりひとりの立ち止まっているところを把握し、その手前までいって、さいごの一歩を自分で跳ばせるなら、「わかる」ということが実現するのだということであった。

このような教育を生み出したのは、部落解放運動とその教育要求であった。それは教育要求から労働する権利の実際の実現へ向かう、生存権そのものの闘いであった。それは、近代日本資本主義がその発展に必要とした選別の体系に対して、小・中等教育の内容を根本的に見直そうとする内容をもっていた。つまり解放運動の教育要求を実現するためには、近代日本資本主義の教育政策と根本的に対決しなければならない内容をもっていた。

人というのは、わかるとうれしいし、この喜びは人の本質的で本能的な喜びである。授業というのはこの喜びを体験する場なのだ、ということを経験した。わかる直前は苦しい。しかし本当に問題が自分のものになっていれば人は考える。生徒の水準よりうんと下から説けば、わかることはわかるが、わかった喜びは体験できない。大切なことは、問題を適切に設定し、何が問題なのかを本当に理解させ。そして自分で考えるようにすることである。苦しくても考えずにはおけないように問題を理解させることである。そこをせずに、何もかもこちらで喋っては、理解はできるが、納得できないままになり、数学の力はつかない。

私は、さまざまな高校生を相手にしてきたが、しかし共通しているのは、みんな「わかりたい」、「わかってにっこりしたい」と切実に願っていることである。わかってにっこりすれば、生徒は絶対に荒れない。いま学級崩壊がよく問題になる。問題の根は社会的なもので深いのだが、一方で、わかってにっこりできる授業を実現する学校側の教育力が低下して、それを補おうと力で押さえ込もうとするから、ますます荒れていく。

日本の教育は、わかってにっこりしたいという生徒の秘めた願いとはまったく逆の方向へ進んでいる。高校教員時代の経験は、わかるためには、はじめにたち返らなければならず、そこをとばしてうわべを感覚的に教えてもだめだ、ということである。ところが、日本国の官僚は、日本の数学というものに対する考えも定まらず、数学を教えるということの経験に乏しく、生徒の数学力が低下していることに対して、本質的な部分を感覚的な説明に置き換え、そうすることでわかりやすい教科書になると言いふらしている。しかしそれでは、わからないときにたち返る根拠がいよいよなくなり、教えるにも土台なしに感覚的にしか教えられない、ということになる。こう

してますます分数のわからない高校生を増やしている。

これはすべて、日本国の教育のなかに構造的に組み込まれている愚民政策の結果である。また、指導要録がたびたび改変され、一貫したものができない根本には、数学の意味についての確かな理解が打ち立っていないという事実がある。したがってまた、学校教育で数学をどのように位置づけ、どのように教えるのかについても、統一していない。

ここで教える技術を身につけたことは、後に路頭に迷ったときに身を助けた。

地域と共生

一九六八年頃から、大きくは七〇年に向けた人民闘争の高揚を背景に、部落解放運動が激しく闘われていた。国家権力によって無実のまま獄中にあった石川一雄氏を解放しようとする闘いを一方の軸とし、生活に関する諸権利を獲得しようとする地域闘争をもう一方軸として闘われていた。

兵庫県は大きい県であり、山塊を背骨としそれを越えていけば互いに海に通じるという地勢は日本の他の県にはなく、瀬戸内海から日本海まで気候と風土は変化に富んでいる。この兵庫県には、都市には都市型の農村には農村の被差別部落がおしなべて形成されていた。姫路の北中皮革争議のころから連綿と続く部落解放運動の歴史があった。また勤務評定反対闘争では阪神間の学校で初期の部落解放運動と結びついて激しく闘われてきた。それを前史に六〇年代半ばから再び困難な闘いが開始され、六〇年代末には高校での差別糾弾闘争へと発展していた。それは同時に地域からの解放同盟支部の組織化と、組織を得た大衆の闘いへの立ち上がりに続いていた。

部落のもっとも切実な要求の一つが教育要求である。部落解放同盟芦屋支部もまた、七〇年代初頭に結成されるやただちに教育要求を軸に闘い、教育条件の改善として文部省の基準を上回る教員定員を勝ち取っていた。私はその拡がった定員枠に伝があって採用されたのである。

教員になってすぐの一九七三年秋、地域ではもっとも解放運動が高揚していたときであった。部落研の生徒らと十一月二十七日に東京・日比谷野外音楽堂で行われた狭山差別裁判糾弾集会に参加した。狭山裁判はその一年前、当時の東京高裁井波裁判長が定年退官するに当たって早期結審と死刑判決を目論んでいたのに対して、解放同盟や学生の実力闘争でそれをうち破ってきたのである。この集会は新裁判長のもとで公判が再開されるのを機に呼びかけられたものであり、主催者の予想を大きく上回る参加者があった。無実は明白であるにもかかわらずひとりの部落の人に死刑判決を出そうとする国家の非道に対して、闘うものの生命の奥からの連帯感一体感が会場

をみたしていた。私のような学生あがりの若者はそれだけで感動していた。

だがその後解放運動は急速に改良主義に方向転換していった。翌七四年五月の明治公園での集会にも行ったが、これは気の抜けたものだった。この背後には、日本社会党の社公民路線への転換があり、日本の大衆運動が七〇年代の高揚から急速に解体されていく端緒であった。公明党や民社党の焦点のはずれたあいさつがこの集会の内容を決めていた。

この当時なぜこうも変わるのかわからなかった。大阪では、社公民路線への転換に反対して、帖佐義行さんが社会党を離れたのもこのころであった。後に、帖佐義行の晩年、親しく交流したなかで、このころの顛末を詳しく知ったが、このとき知るよしもなかった。

このような全国的な右傾化のはじまりの中で、地域では多くのことを学んだ。教科を教える他に取り組んだのが障害生徒の高校への進路保障だった。今でこそある程度受け入れられているけれども、当時は全国でも初めての試みであったのではないだろうか。これを生みだしたのは部落解放運動とその教育への要求であった。新米の教員であったが、先頭に立って取り組んだ。在日朝鮮人生徒、障害生徒、被差別のもとにあるいろんな生徒を受け入れ、一般の生徒の心を開き、共生のなかで教育を試みたのだ。

行動が先行しながらも、その試みの意味を在日朝鮮人生徒Kを通して深く考えた。私はKの姉を担任していた。彼らは在日朝鮮人三世で、祖父母が日本の植民地支配の時代に土地と仕事を奪われ、仕事を求めて日本に渡らざるをえなかった。祖父は当時もう亡くなっていた。父母は水道関係の力仕事を続けてきていた。同じ朝鮮人家族が何軒か寄りそって生活していた。父母は戦後働きずくめの生活で、もう一人の妹との三姉弟は祖母に育てられた。弟はただ一人の男の孫ということで祖母がかかりきりで育てた。

姉の担任になってはじめて家に行ったとき、祖母は姉のことよりも弟のことが気がかりなようすであった。彼が言葉を覚えた最初の相手はこの祖母である。しかし祖母は日本語が不自由で、彼はあまり同じ世代の日本人の子供と遊ぶこともなかった。その結果、彼は日本語もできず、かといって朝鮮語もできないままに大きくなった。

子供が言葉を意味あるものとして覚えるときに大きな力となるのは、母が子供を寝かしつけながら話して聞かせる物語である。彼の親はその時間がなく、祖母には時間と語るべきことがあったが、言葉が足りなかった。彼には母語がしっかりとは形成されなかった。小学校では当然に勉強はできなかった。教師の言っていることが十分にわからず、教師もまた彼のことがわからなかった。中学では障害児学級に入れられた。中学から説明されたと

き、母親は何のことかわからないままであったという。彼は何か特別に手当すべき障害があったのではない。学級でのお荷物になったのである。

しかし彼は高校へ行きたい一心だった。中学を訪問したとき彼が姉の担任の私の所に寄ってきて「高校へ行けるか」と聞いたのが忘れられない。日本は敗戦後「教育基本法」ができ、すべての子供の平等な教育権の保障がうたわれたが、法律は法律にすぎず、部落差別、民族差別、障害者差別などによって教育権を奪われた子供たちの教育保障は放置されたままであった。親たちが同じ思いを子供にさせるなと立ちあがって、やっと事態はすこしずつ動き始めていた。

そのなかで中学校も彼を障害児学級に入れてきた意味を問い直し、三年生は普通学級に戻り、ようやくに私の高校へたどりついた。「普通学級」だの「障害児学級」だのというのも差別そのものであるが、当時の言い方のままにする。

彼と同じ学年で、はじめて普通高校に来たある障害生徒は高校へ来て最初に詩を書いた。

ぼくは、やりたいことがたくさんある。
絵をかくのが好きです。
字をおぼえて、本を読みたい。
ちえとちしきときおくりょくと自由がほしい。

これはKの気持ちでもある。こうしてKの高校生活が始まった。とにかく勉強がわからないなかで休まず学校を続けた。字を覚え計算ができるようになり、自分の考えがいえるようになった。そして、神戸の靴工場に就職していった。その後かわいがってくれた祖母の死、家の火事、かたまって住んでいた何件かが焼けた。そしてあの大地震である。工場は焼けてしまったが、その後働き口を見つけ家族とともにがんばっていることまでは伝え聞いている。

このような試みが七〇年代後半から八〇年代前半にかけてこの地で行われてきた。これはまさに六八年の闘いではないか。六八年の闘いは、単に都市の青年学生のものであったというよりも、このように近代日本の中で声を潜めて生きてきたものがはじめて声を上げた闘いであったのだ。

しかし、八五，六年頃、ちょうど行革がいわれ始めた頃、地域の教育委員会は「これまでの障害児教育は間違っていた。普通高校に障害生を入れてきたが、十年経って全国どこにも広がらなかった。」との結論を内部的に出し、学校つぶしに走り始めていた。

「解放教育」という言葉は行政も使っていた。それは運動の側の力が強いがゆえであった。「解放」とは「差別し抑圧するもの」からの解放であり、闘いの相手を指示しまた考えさせる。それは官僚機構には危険な言葉であっ

た。運動の後退期にこの言葉は「人権教育」に置きかえられた。闘う教育運動が偽善的な人道主義に置きかえられた。この流れは今日につづいている。

ここで十年取り組んできた方向と考え方こそ、基本的に、今日の社会における障害者解放教育運動としてあるべきものと確信している。同時に、地域のなかで、障害児教育と障害者解放運動の方向について、実践的にも考え方においても、対立と論争があった。それは障害者差別とは何か、障害者解放とは何か、そしてその運動はいかにあるべきかをめぐる基本的な問題であった。行政の進める分断・隔離政策と共同して闘いながら、内部においてはおおいに論争し、地域の教育運動を力強く進めていくことを願ってなし得ることはした。

言葉と文字

教員時代、言葉と文字の問題を、多くの経験を通して考えさせられた。

第一には、在日朝鮮人三世の少年Kを通して言葉を取りかえすということについて教えられた。近代の日本は、台湾や朝鮮を植民地支配した。日本の植民地政策の基本は「同化」であった。それは要するに、言葉を奪い文字を奪い民族としての同一性を解体して支配しようとするものである。Kの問題もまたこの政策の結果である。

私はこれに対して、「なんと日本はひどいことをしたことか」という観点から考えていた。しかし、考えてみれば、Kは、母語を奪われよって立つ言葉が定まらないなかで、必死に勉強し生きる力をつけ、言葉を取り戻し、日本のなかで生きぬいている。奪われたものは、奪われたことを自覚し、取り戻す闘いをはじめることで、人として復活する。彼らはたくましい。

それに対して、むしろ日本というもの自体の内部に大きな空洞ができてしまった。「人の自由を奪うものは自ら自由ではありえない」と言うが、まさに、言葉を奪い、姓を奪い、名を奪う同化政策が政策として可能だと考えたところに近代日本という文明の底の浅さがあり、そのことをわれわれ自身が本当には知らないままにこの百年を走ってきた。その結果、われわれが人としての土台を失いつつあるのではないか。オウム真理教の事件、神戸の少年事件、等々はその空洞が引き起こしたのだ。

最近、テレビで、七〇年代初期にフォークソングの旗手だった日本人音楽家が、その後自分を見失い農業に従事するかたわら遍歴を重ね、ついに、韓国の伝統音楽を現代に復興した音楽家に出会い、勇気を与えられ、自らも日本の伝統的なリズムを復興しつつある、という記録が放映された。ここでも同じことが言える。伝統と文化を奪われた韓国こそが、それを自覚して取り戻し、逆に日本人の側が韓国芸術家に教えられたのである。

私は、私の固有の言葉が日本語であるとの自覚をもつ。だからこそ、かつて彼らの言葉である朝鮮語を奪ったことの意味もまた理解できる。そしてまた、なぜ固有の言葉を奪うことが許されないのかもわかる。今日、世界の各地では、人は固有の言葉を守るために命をかけている。かつての三・一蜂起もまた朝鮮語を守るための命をかけた蜂起であった。それに対して、現代日本国の言葉の固有性に対する鈍感さは、現代日本社会の弛緩そのものである。

もう一つ、文字についても教えられた。私は学生時代に受けた西欧言語学の影響もあって、教員をしてからも「言葉とは音であり、文字は音を写すものである」、「ロゴスは音に宿る」という考えに立っていた。しかし、人にとっての文字の意義を再認識する経験をし、文字というものはもっと人の言葉に本質的で内在的のものだと考えるようになった。

部落解放運動の土台にあったのが「識字運動」であった。六〇年代末当時、日本では明治以来の教育政策の結果、識字率は世界的にも大変高いものであったが、しかし、部落の識字率は当時も日本の平均を大きく下回っていた。明治になっても部落の人々は職業を奪われ不安定な職に追いやられ、食べていくには小さな子供の労働を必要とした。そのため、部落の子供は子守や奉公に出され、学校へ行けなかったり、小さな兄弟を背中におぶっていかなければならなかったり、しょっちゅう学校を休まなければならない状態であった。学校に行っても「授業中、背中の子が泣くからじゃまになると言って、水の入ったバケツをもって廊下に立たされた」とか「月謝がおさめられないために学校へ行けなかった」などの経験を持つ人が少なくなかった。

近代日本の学校は部落の子供たちを切りすて、邪魔者扱いをさえしてきた。その結果、読み書き計算というもっとも基礎的な力を保障されないままに放置されてきていた。つい六〇年代末まで、それが続いていたのです。私が担任していた生徒の親にも「運転免許が取りたいが、字が読めず筆記試験が受けられなかった」という人がいた。六〇年代後半から七〇年代にかけて多くの部落で解放運動の組織が生まれた。組織化されて差別に対する闘いが始まると、それに伴って、内部から、字を覚えたいという要求が出てくるのは必然であった。「識字学級」が始まり、学校の教師がその支援に行った。支援して、実はそれ以上に多くのことを学んだ。

そういうなかで私は、識字学級で字を覚えたある婦人の「字を覚えて、はじめて夕焼けを美しいと思った」という作文に出会った。私は、文字を覚えるということを、免許が取りたいとか、役所の窓口で困ったとか、実際の生活での不便の問題と思っていたし、識字学級に来る人もまたそこに現実の動機があったと思う。しかし、字を

覚えるということはそれ以上の意味があった。字を書くことによって人は自分の考えを客観的に見るようになり、自己との対話が「独り言」から自覚的な「対話」になる。この対話を通して、人は深く人になる。そのときはじめて「夕焼けが美しい」。その意味で、文字は言葉にとって、つまり人間にとって、本質的で内在的なものであると知った。

自分が抱いていた近代日本語への違和感は、ここで新たなより深い問題とつながった。在日朝鮮人と言葉の問題、被差別部落と言葉の問題はいずれも彼らの問題ではない。彼らはたくましく生きている。彼らの生き様に照らし出される近代日本人の問題なのだ。

人として

労働運動　一九七七年から労働組合の支部の役員をし、一九八一年から六年間は職場の分会長をつとめた。小さな職場の組合であったが、勤評闘争の伝統を受け継いで、地域や生徒とも連帯し、原則的な組合運動を進めた来た。

この地域で行われた試みは、実にさまざまの問題をおもてに出した。障害生の教育という試みも行われた。だが、こういう試みは、一定の力関係が地域にあるあいだしか持続し得ない。一九八六年中曽根首相の行った行革の地方への波及のなかで、運動は弾圧され解体され、施策は逆方向に「正常化」された。

一九八六年九月二九日、市の教育委員会が分会長と書記長に対し、時間内組合活動を違法であるとして、停職一ヶ月の処分をおこなった。これは八〇年代労働運動の右傾化と解体のなかで起こったものであり、それまでは認めてきた正当な組合活動を、一方的に違法とするものであった。分会が属していた高教祖は、問題の本質をとらえることができず、組織的にはまったく闘わなかった。

地域やさまざまの労働者の支援を得て、数年の裁判闘争を経て一九九九年地裁勝訴、二〇〇一年秋には当局の上訴断念で勝訴が確定し、この処分自体は撤回させることが出来た。しかし、この労働運動への弾圧は、市が、行政改革の名の下に、いわゆる「弱者切り捨て」政策を進めるために、それに反対する勢力を切り崩すためのものであった。職場で進めていた障害者の教育保障などの取り組みが、この後すべて解体され、ついにこの高校自体、二〇〇七年三月で廃校された。

新左翼のなかで　教員になってから、あらためてマルクス主義の諸文献を読んだ。学生時代とはまったく違う読み方ができた。人民の叡智を結集した地下水脈としての党、ここに私の実践的な突破口があるように思われた。結局は党なのだ、というところに私の思想は凝縮していった。

職場に、六八年四月二十八日に上京して死ぬ気で闘っ

たという元活動かがいた。彼は奄美大島の出身で神戸外大の夜間を働きながら出て、英語の教師をしていた。立派な人だった。彼と教育運動を一緒にやりながら、ブントのグループとも知り合った。こうして、地域で労働運動や部落解放運動を担う人たちと、党を作り出そうとする活動をはじめた。そのころ関西各地の生産点に入った共産主義者同盟の流れをくむ人々と出会った。彼らと「新左翼運動を総括し、党を建設しなければならない」という点で一致し、この点で一致するものが集まってグループを結成した。

この世界のなかでそれを根本から否定する新しい人の結合を実現しようとした。結局すべてはここを軸としていた。

しかし、いかなる点で新左翼運動を総括するのか。それは自分自身も、またグループとしても明かではなく、ただこのままではだめだ、という認識しかなかった。したがって、私自身、新左翼の思想潮流のなかで学生時代から過ごし、当然のように「日本は帝国主義である。日本革命は社会主義一段階革命である。反スターリン主義」をそのまま自己の思想としていた。

一方で私は、職場における教育運動と労働運動に真剣に取り組んだ。現実の労働者の要求をかかげて闘ううちに、「現実に労働者が要求していることは民主主義ではないか。労働者階級の存在からくる階級としての普遍的な要求は民主主義の実現なのである」ということに気がついた。ここに党の綱領と革命論は立脚しなければならない。歴史を観念で飛び越えることはできないのである。

われわれのグループはいつまでもと党的な組織に脱皮しえなかった。真の原因は、その立脚する思想が真理でないからであった。しかし、私はそのことがわからず、党たる機関活動を建設せよと組織論を先行させて内部に訴え論争していた。

当時、いわゆる日本共産党代々木派と部落解放同盟の対立が頂点に達し、八鹿高校現地では、高教祖の組合員と解放同盟員の対立が激化した。解放同盟の教育に対する要求は切実であったがまた性急でもあった。一方，教師は話し合いを拒み集団で学校を離れようとした。こうして衝突が起きた。

私は、解放同盟の現地調査に参加した。それを自分の観点で見てみると、対立する人々の要求をより戦略的な立場から調整し、改良的な成果を積みあげながら、運動を展開するためには、党的立場にあるものが責任を持たねばならないのに、高教祖指導部にも解放同盟指導部にも、そのような観点はなかった。現地調査をとおして、党というものの決定的な意義を知る。解同は反共の立場だった。結局最後は党が闘う党かどうかの問題だと考えた。

私は自らマルクス・レーニン主義を根底から学びなおそうとして、七八年秋、神戸で若い労働者とともに徹底

的に原点にかえって学んだ。その内容を総括し、自らの思想を整理して、七九年六月「綱領的立場を獲得するために」を執筆。ここで基本的に連続革命論を獲得した。連続革命論のみが、哲学的唯物論に立脚した実践的綱領なのである。当時は哲学に依拠してではなく、実際は経験主義的にそれを獲得した。

この前後よりこの立場をもって論争を開始したが、しかし内部に呼応するものはなく、逆にあるものは「これからはエコロジーだ。」といい出す始末であった（その人はそれでもそれを実践し今は農業をやっている）。私はこの時点では新左翼を総括しきったわけではなかった。しかし、現場の労働組合の幹部として、新左翼の思想は誤っており、実践的ではなく、それで闘えないことははっきりとした。

グループの結集軸は反スターリンであり、結局煮詰めていけば反スターリンを軸に左翼を再結集しようとするものであった。私はそのようには考えなかった。ロシア革命は歴史上で始めて社会主義の権力を樹立したものであり、革命に続く社会主義建設もまたまったく経験のない始めてのものであった。しかも、全世界の資本主義に包囲され直接的にはナチスの反革命陰謀の渦巻く渦巻くなかで新しい社会を建設しなければならなかった。その過程で、今の歴史的条件なら別の方法ですべきさまざまの問題があったことは確かである。しかし、スターリンと当時のソ連が千万人におよぶ犠牲をはらって反ファシズム連合の中心として第二次世界大戦を闘いぬいたことは事実であり、八百万人に及ぶ犠牲を払った毛沢東と中国人民の日本軍国主義との闘争とともに、戦後世界を創り出したことは事実である。戦後の一定の改良的な成果としての政治活動の自由もこのスターリンと毛沢東、そのもとで闘ったソ連や中国人民の闘争なくしてはあり得なかったのである。戦後の新左翼の反スターリン主義はこ政治活動の自由のうえに可能であったのであり、スターリンを本当に否定すればそれは自らを存在させているその土台の否定を否定することになる、私は学生時代からこのように考え、当然のように学生運動の中にあった反スターリン主義とは一線を画していた。

私はここにも真理はないと結論した。その時考えたことは、第一に、真理とはすべての、土台における実践の検証に耐えうるものでなければならない。第二に、真理に依拠しない組織は、絶対に党たりえない。第三に、党たりえない組織の団結は、すべていずれは崩壊する。事実、グループは後に私を「スターリニストだ」と除名して程なく解体した。歴史は非情である。

徳球の党？　私はこの前後に別の党派に出会っていた。真に出会ったのはこの新左翼グループの内部における思想闘争のなかでであった。私の心をいちばん揺り動かし

たのは「哲学だ！」という呼び掛けであった。一九七九年夏の日記にこういうことを書いている。「党建設、これは自分の全生活の目的であった。そのように断言できる。思想建設を軸とするすべての生活はここを軸にしていた。しかし、これまで、党はなく、中心はなく、自分の力量はまったく不十分であった。今、私は党に出会っている。『哲学を離れて革命を論ずるから、平和主義、議会主義が生まれる。哲学を離れて政治を論ずるから、経済主義が生まれる。哲学を離れて戦略・戦術を論ずるから改良主義が生まれる。哲学を離れて党を論ずるから、「左」右の修正主義が生まれる。哲学を離れて歴史を論ずるから、清算主義が生まれる。哲学を離れて社会主義・共産主義を論ずるから前途に失望してブルジョアジーに身を寄せるのである。』これは正しい。今日までの自分の初歩的な経験に照らしてまったく正しい。この思想をもつ党は党である」当時の自分の考える力では、これが精一杯だった。彼らとも論争した.

一、日本は独占資本が支配するが、帝国主義国家となっているのか／権力規定論／日本は帝国主義ではない。

二、ブルジョア独裁下の革命は、一段階社会主義革命か連続革命か／連続革命論／プロレタリア独裁下の連続革命論。

三、プロレタリア権力は、敵権力を打倒して初めて樹立されるのか／二重権力論／敵権力に対抗して、下から権力は成長する。

四、世界同時革命が正しく、一国社会主義建設路線は日和見主義か／一国革命論／一国社会主義建設は、レーニン主義である。

五、共産主義運動の変質は、スターリンからかフルシチョフからか／反スタ批判／歴史を清算してはならない。

これらの点で党派の基本は正しく，その実践綱領も自分の経験に照らして正しいと考えられた。

一、職場・生産点からの原則的権力闘争と、人民権力の樹立。

二、人民の要求を掲げ、人民戦線を構築し、民主主義革命へ。

三、党は理論と実践と、そして革命的歴史を継承し建設する。

こうして、一九八〇年七月一五日，日本の革命運動の継承を掲げる党派の結成に参加した。結党にあたって徳田球一を継承するということを正面に掲げたことは、まったく異議がなかった。まさにそうだ、と思った。徳田球一に対する尊敬と敬慕の気持ちはいまもまったく変わらない。むしろその後の歴史のなかで、徳田球一を掲げるこの私の参加した党派が実は徳田球一の顔に泥を塗るものであることが明らかになった。当時はそこまではわか

らなかった。人は、いずれにせよ社会を変えようとするときには組織を持たねばならない。そしてそれか背歴史的・堅実的・社会的なものである以上、具体的な先人の努力を継承してそこからはじめなければならない。この点で、八〇年代を徳田球一の伝統を現代に復興しようとして闘うことに、激しく燃えるものを感じていた。

私は、一九七三年からこの職場に働き教育運動と労働運動に真剣に取り組むとともに、党派の活動にも打ち込んできた。一九八六年の弾圧を受け、労働運動はここまでやったのだしかし労働運動のなかで問題は解決しない。これからは党派の活動に専念しようと考えた。

このとき地域の解放同盟支部長の故山口富三さんに相談した。彼は日本の戦後革命の時代を経験していた。その時代の闘う共産党を支持していた。私がそのような党の再建に働きたいというと，それに賛成し激励してくれた。山口さんとはもっといろいろなことを話したかった。とりわけ部落解放運動や解放教育運動について話したかった。

一九八七年三月、職場を去った。

場を作る

一九八七年三月に教員をやめ党派専従となって全力をつくした。が、最後にその活動はすべて破産した。一九九三年秋だった。そして再び高校生に教える仕事に戻った。

その一年半後に阪神淡路大震災が起きた。これは、否応なく人生の再起動を促した。こうして、前半生に出会った課題に取り組む場としての青空学園を作り、思索と制作をはじめた。そしてようやくに、このようなことをする人としての自分に落ちつき、世に出てゆけるようになった。

専従として

今も徳田球一を尊敬している。当時、徳球を継承することを掲げる党派は他になかった。この党派で専従活動を行うことになった。なんでそんな危ういことをとあきれる者もいたが、教員活動家ではない普通の教師がむしろいろいろと励ましてくれた。党派専従となってからは、機関紙編集部に勤め、組織中央に入って西日本の責任者になった。その一方で企業経営もした。私にとっては結構困難な時代であった。

生活は激変した。党の経営する輪転印刷機をもつ工場が財政を支えていたが、乏しいものであり、生活費もままならないようになっていった。財政に少しでも寄与すべく、版下制作、印刷の経営を起こしたり、さまざまの借り入れをおこなったりしながら、一日一日を生きていくという風であった。

一九八九年二月、このような経済的負担に耐えかねて、基幹工場の党がまとまって脱走するという事件が起こった。この問題を「党からの経済主義グループの脱落は、わが党における左翼再編成」と位置づけ、とにかくがむしゃらに財政を回し、機関紙を出し続けた。バブル経済の時期であったから数年は自転車操業ができた。

大阪に『人民新聞』という新聞が出ている。そのグループの中心の上田等さんは、共産党の五〇年問題の時代から徳田派であり、六全協のあとも宮本に反対し抜いた人であり、党の議長とその点で同じ立場であった。九〇年に上田さんらと再会、政治、経済での協力関係ができつつあった。彼らは幅広く経済活動をおこない、その中で中国ともつながりがあった。彼らの世話で、一九九一年三月、二度目の中国旅行をすることができた。

彼らからはいろいろと財政的な支援も受けた。多くの迷惑もかけた。その後私が組織を離れてからも、個人的

にも大きな援助を得た。しかしにもかかわらず経営は困難を極めた。資本主義の包囲のなかで社会主義を建設していこうとする党が、バブル経済に振り回され、支持者から提供されていた土地を担保にビルを建て、建物を担保にまた借り入れを起こす、実質的な生産活動よりも当座のやりくりを優先させていたのだから、話にならないのであるが、当時はそこまで考える余裕すらなかった。かくして大阪でも新しい自社ビルを建て移転した。すべてバブル経済の産物だった。九三年にはこれらの建物もすべて人手に渡った。

この党派は実践性が皆無だった。ただただ企業活動からカネを吸い上げ機関誌を出すだけであった。拠点経営も結局離れていった。内部にいて、このようなことでは社会主義企業の建設など不可能だと思った。バブル経済の時代であった。左派党派がバブルに踊らされていた。

一九九三年の秋、バブルの崩壊とともに党の企業群が軒並み連鎖倒産した。経済的な崩壊はそれだけでは思想的なあるいは経済的な崩壊にはならないはずである。しかし、その過程で、「この党では革命はできない」と考えなければならない事実が続出した。

企業の倒産、経済の崩壊という事態をうけて、中央の会議が開かれた。この討議では明確に二つの違う考えが存在した。

第一、党のやってきたことは正しい。党の危機ではない。現在の事態は党を取り巻く諸条件が困難であるためにおこった単なる経済上の困難であり、今までどおり闘い続けるべきだ。

第二、それは外因論だ。問題は内因にある。党が実際にやってきたことは失敗であり、敗北した。総括し根本的に転換しないかぎり、このままではだめである。

これは相反する考え方であり、私自身は、第二の立場であった。そして、「今日の事態は敗北なのか相対的な経済的困難なのか。党内には今回の事態を相対的な問題とみなし、従来の作風のまま党活動を続けていこうとする潮流が依然として存在している。だが、事実は敗北であり、作風の根本的転換なしに党の再生はあり得ない。敗北した事実は何か」と私自身の問題として次のことをあげた。

借りるときには泣き落とし、返す段になって無いものはないと約束は破る、企業の経営・資金運用を無視して『企業を潰すわけにはいかない』と何でも持ち出す、大衆の財産を金融屋に注ぎ込む自転車操業、『この金があれば』『ここさえ突破すれば』と資金を動員するがそれが何度も何度も繰り返される、こういったことを企業建設の名のもとにしてきた。

『いつまでに返す』という約束がその場しのぎで言われ、返らないことを問いただされると『それは努力目標だ。社会主義の崩壊と経済テロが党の経済的

困難の原因だ。返せないのはそこに原因がある』と言う。いよいよ経済的に責任が取れなくなると『どう政治的責任をとるか』と考える。経済を政治で支払おうとする。私自身ふりかえってこういう作風であった。だがこれは私だけのことではなく全党的にこのようにやって来たのではないだろうか。

貸したほうからすれば『社会主義の崩壊とか経済テロとかの経済的困難は始めからわかっていた。そのうえでいつ返すと約束したのではないか。始めから返す気などなかったのか。だます気だったのか』ということになる。また、経済的責任は経済のなかで果たさなければならず、政治的な手形を切って経済に代えようというのは内容も方法も独裁であり、それは党のおごりである。

資金動員に応じた大衆は、『何か信念をもってやっている』と感覚的につかみ、結局のところ『共産党だ』ということを承知し、またそのゆえに、資金動員に応じてきた。手形の交換に応じてきたのも単なる経済上の理由だけではない。

それが今や『共産党がそんなことしてよいのか』という声が渦巻くまでに至っている。手形の交換に応じてきたために倒産の瀬戸際にいるある企業の社長は、『われわれをこういう事態に追い込んだ党とはいったい何なのか』と、私の家に直接来た時に怒りをもって言ったが、これは氷山の一角である。

組織の道徳的権威はうち捨てられ、大衆から軽蔑され背を向けられる存在になってしまった。これが現実である。まじめな直接に大衆と接している党員、労働者・生活者としての常識をそなえた党員が、このような現実に直面し、耐えがたくなって去っていった。この間去っていった党員は、組織が大衆の信を得られなくなっていることに耐えがたくなって去ったのである。本当に大衆に対して権威と道徳性のある組織であれば、経済的困難に耐えられる。そうでなかったから、経済を理由に去っていくのである。

経済のために権威を投げ捨てることは経済主義そのものではないか。われわれは経済を軽視した結果経済に復讐されたのである。これは敗北である。

この事態のなかで、私の励みになったのは、中国革命で毛沢東の提起した「三大規律・八項注意」だった。同じ会議で、次のことを提起した。

われわれの『三大規律・八項注意』を。

毛沢東は、一九二七年秋の収穫蜂起の後のもっとも困難な時期に、党と軍の改編をおこない、部隊に武装宣伝隊の任務を与え、まったく新しい軍隊であることを宣伝させた。その前提として、『三大規律・八項注意』を提起し、高い倫理性を備えた軍に生ま

れ変わらせ、中国共産党の権威を人民のなかに打ち立てていったのである。このときも飢えのために敗走の軍の規律は乱れ、人民に恐れられていたのである。これをつくりかえたのである。

われわれもまた、その段階に至っている。われわれ自身が提起した、『人民戦線とは真の人間性（階級的人間性）、真のヒューマニズム（革命的ヒューマニズム）、真の人間愛（共産主義的人間像）にみちた人びとの集りであり、そのような闘いと組織と集団をめざす運動である！』ということを、みずから事実をもって実践しなければならないのである。

すでに明らかにしたように、実際にやってきたことは、主観的にどうであれ客観的にはまったく逆のことを積み重ねてきた。

いま『三大規律・八項注意』として定式化することは力に余る。この間の教訓としていえば少なくともつぎのような自己規律が必要である。これは自己規律であり、党内、党外問わず実行しなければならない。

- 言ったことは守る。
- できない約束をするな。
- 借りたものは返す。
- 経済的責任は経済でとりきれ。
- 裏づけのある展望を語れ。

実際はこれとは全く逆に進んだ。その後の、二年間の倒産の事後処理の過程で、すべての人がその本性をさらけ出した。当時の政治局は、抱えた負債に対して自己破産するという方針を提起し、実際そうしていったが、私はその方針は敗北主義であると考えた。なし得るすべての努力はすべきであるし、いろいろな協力者との手形の融通関係のなかでは、自己破産は直ちに協力してくれたものが行き詰まることを意味していた。それでも自己破産するなら、これまでの党への協力者を裏切ることになると考えた。

こうして最終的に九三年、実質的に組織は解体した。私は革命党としてその組織は終わったと認定し、そこを離れた。連続革命論と日本革命の伝統の継承、それは革命党の必要条件であった。しかし、それだけでは現代革命を担う党派としてはまったく不十分であった。党派としての実践性を欠落させていた。

その実践性は、実は言葉に対してどのような態度をとるかによって、定まる。日本の左翼党派はおしなべて翻訳語の世界の内にある。もとより社会主義思想そのものは、歴史の総括を踏まえて生みだされ、闘う現場には外から持ちこまれる。しかしその言葉が翻訳語そのままでは、長い歴史と固有性を踏まえた思想はとはならない。

レーニンが『哲学ノート』で言っているように、普遍性は個別性をもって実在し、弁証法的な普遍性は実在する

な個別性と不可分である。しかしこの言葉の意味を、日本の左翼党派は理解していたか。

人は言葉によって人である。人をして人とする言葉、それを固有の言葉という。人の条件としての言葉、それが固有の言葉である。新しい言葉は固有の言葉から拓かれねば意味をもたず、考える力は固有の言葉を耕さなければ成らない。人は固有の言葉で夢を見る。夢見る言葉で思い、考え、そして語る。それなくしてどうして言葉が人の心に届くだろう、どうして言葉が人と人を結ぶことができるだろうか。

私自身が機関紙部にいた。したがってこれは自己への批判でもあるのだが、左翼党派の言葉は働くものの心には届かない。

近代の漢字造語はものとことのはたらきを覆い隠した。思うのはものであり、考えるのはことである。ものとことこそ固有の言葉の柱である。明治近代は「思考」によってものとことのことわりを隠した。こうしてひたすら西洋化の道を走ってきた。造語「思考」は近代日本の構造を象徴している。これ打ち破り、日本語のことわりを解きはなとう。それをもと近代語を再び訓じ直そう。そのためには訓じる言葉、つまりは固有の言葉それ自体がもういちど定義されねばならない。西洋語に依るのではなく、固有の言葉それ自体のなかから訓じ直そう。

私にとっては、思想的にも実践的にもすべては一からの出直しになった。とりあえずは少なくない経済負担をどのように処理するかが、火急の問題であった。組織は一切の負債を個人に負わせたまま逃亡し続けた。個人保証した負債はすべて自分でかかえながらの出直しであった。多くの友人の協力を得た。弁護士の友人は可能のことはすべてやってくれた。昔の職場の仲間は、これで食いつなげと塾講師の仕事を見つけてくれた。こうしてさまざまの問題を一つ一つ乗りこえてきた。

この頃、大阪北摂の上田等さんには一方ならぬ世話になった。上田さんの助力がなければどうなっていたかわからない。上田さんは、一九二八年八月生まれ、一九四六年、十八歳で日本共産党入党。朝鮮戦争に際し、大阪の地で反戦闘争を闘い、いわゆる吹田操車場闘争の中心にたって闘った。一九六四年日本共産党除名。以来紆余曲折を経ながら、一貫して大阪北摂地域にあって、日本革命と人民の解放のために闘い、二〇〇七年一月二〇日、その生涯を閉じられた。上田さんには心から感謝している。私が上田さんたちに負った債務を最終的に処理できたのは二〇〇九年の一月十九日、上田さんの三回忌の前日だった。上田さんがもういいだろうといってくれたような気がしている。またこの頃数年間、家族、兄弟にも多大な迷惑をかけた。それらを忘れることはない。

振りかえれば、私のなかに、人生の求道や根元的な文化問題の解決を、党組織活動に携わることによって実現

しようとするところがあった。求道を党活動に置き換えてしまうところがあった。その崩壊から、問題をそのものとして内部から解決していかないかぎりだめであって、党は問題の解決にはならないし、革命もまたないのだということを、思い知った。

日記から

党派活動に従事しながら、思索日記は欠かさなかった。党派の政治活動からはみ出ることを、考え記録していた。その一部である。母の癌が、私が教員を辞めて専従となった時期に進行をはやめたことはまちがいない。表に出さない人であったが、心配をかけてしまった。母は戦時中の男手が足りない時代に小学校の代用教員をしていた。戦後、よく教員時代のことや、教えた生徒のことを話していた。私が結局教育関係の仕事を生業にしたのは、母の影響がある。以下の日記は、いささか自己陶酔があり、いい気なものだという面がある。今はそれをおさえて、当時このように考えていたという事実を記しておく。

◆一九九〇年四月五日

母の一周忌を終えてきた。

四月一日、宇治奥の山に新しく建てた墓に納骨、法要をした。

一年経ち、その喪失感は深い。昨年の四月二十三日が忘れられない。あの日、ほんの一時であったが、庭の草木を父と三人でながめた。あれが最後であった。そのすぐあとから苦しみ始めたのだ。あの日のことは生涯忘れられない。あの時の畳のひんやりとした感触、あの部屋の空間の明るさ、今となってわかる人生最後の時の緊迫感、そのすべてが忘れられない。一年経って同じ時節になり、母のいない同じ空間に立って、あのときの、時の深さを改めて知った。救急車で入院してからも、母は気丈夫であった。ベッドの蒲団の乱れを兄妹二人になおさせ、「きっちりしないといやなのだ」といった。そのあと「Mちゃんありがとう。にいちゃんありがとう」といった。それが別れの言葉であるとは、実際、思いもしなかった。

追伸（二〇一三・一・二二）：六十五歳になってこの言葉は重い。私も同じことを言うだろうとつくづく思う。こうして人は代をついできたのだ。

父は、入院してからの日々をとおしてあきらめをつけたのだ。最期の苦しみの幾日かを世話して、断念したのだ。手術の日と死んだ日に、「仏さんのような人だ」とくりかえしていた。父が母の死と直面していた日々に、私はなんと軽薄であったことか。最後まで甘えていた。

さらにその前、一九八九年の八月、私が活動で上京するときに、一日宇治に泊まった。朝六時に起こしてくれた。あのときもうずいぶん調子は悪かったはずなのに何

もそのことは言わず、親戚の人々の消息などを語っていた。そして私が家を出るとき後ろから見送ってくれた。その背後の視線も忘れられない。私は本当に心配ばかりをかけてきた。次に実家から連絡があったのは九月、癌が見つかったということであった。今になってそのときの母の心を思う。

母は宇治の土となった。わが故郷宇治は、母の眠る地となった。故郷の思い出のすべては母の思い出と一体となった。川東の間借をしていた家から近い空き地で、妹を背負い私とともに父の帰りを待った夕方。宇治川東岸の借家の裏は、宇治川であった。冬の宇治川の凍てつく寒さのなかで、もたれた石垣の温り。その温りを求めて陽だまりのなかにじっとしている越冬中のハエ。山吹の咲き乱れる興聖寺の琴坂の、あの明るさ。宇治川の四季。すべてに新たな生命が宿った。わが人生は、母の死をもってその前半が終った。

◆一九九〇年四月三十日

新緑の美しい時節となった。昨日から父が来て泊っていた。母が死んで一年、残されたものの心のなかに今、いっそうい大きく生きている。

自分自身のなかに新たな思想が生まれつつある。『基本思想』のなかで自ら到達した一つの考えは、つぎのことであった。

現代が失った人間存在への問いかけを、自分自身の問題として、真理が明示されるまでに追究せんとするならば、まず党でなければならない。無私に革命的実践に身を投じるものでなければならない。『われわれの決意』をそのまま実践するものでなければならない。そのうえで、人類精神の再建は、自然になされるものではない以上、この荒廃を自らの問題としたものが、目的意識的に闘わねばならないのである。

階級的人間性、革命的ヒューマニズム、共産主義的人間像、これは、階級社会を止揚して、人間の本当の歴史のなかで、その歴史のための闘いのなかで、創造される新しい人間である。この創造はすなわち、真理の顕現そのものである。そしてこれは、形式的な目的意識性では、絶対に自らのものとすることはできないのである。主観的な思い込みによって真理が顕現することはない。客観的に自らの境涯を高めないかぎりあり得ない。それはすなわち、名実ともに真の党とならねば、真理もまた、自からのうちに顕現することはないということである。

この新しい人間の思想の、その本当の内実は、まだ私自身の中に生まれてはいない。ただ、原則的な党たらんとするなかで、待つのである。党的実践の充実のなかで、すべての風光は輝きを増し、人間に対するかぎりないい

つくしみが生まれる。母の死は、私の思想に本当の深さを与えた。死をもってわが思想を育ててくれた。母は私のしていることがわからなかったのではない。その浅さを見抜いていたのである。この死を受け止められる思想を築けと言っているのである。課題がこのように提起されている以上、解決は可能である。

◆一九九〇年五月六日

連休は終った。雨が続いていたが、やっと今日、六日になって五月晴れとなった。連休中になすべきはした。今日は夙川河原でYさんと焼肉をした。昨年は母が死んだ直後でしなかったが、一昨年までは毎年恒例であった。雲一つない本当の五月晴れであった。むせかえる草の匂いの中に居るのは心が休まる。

連休中に三―四月度の報告書を書いた。この連休中に、毎日の活動の中にあって動じない自分をもう一歩深めたいと思っていた。自分の基本思想を文書にすることはできた。しかし、それはまだ方向を示しえているのみで、その方向において新しい人間を創造してはいない。自分が考えていたのは、自分自身一体何を求めているのかを見極めたいということであったのかもしれない。

『井之川巨編　江島寛・高島青鐘の詩と思想　鋼鉄の火花は散らないか』（社会評論社一九七五年三月三十一日発行）を再読した。江島寛、高島青鐘や編者の井之川巨、そして丸山照雄らの人生があのようにあったということは私に勇気をあたえ、また歴史が現在のわれわれに、あの人生を本当に生かすという任務を与えたことに対する感謝を起こさせる。今、党のもとで生きることができることを心から感謝すると同時に、解決できる条件が生まれている今、人生の価値を表現しうる本当の文学と文学運動を再建しなければならない。実際、党がすべての問題なのである。

昨夜はまた、種田山頭火のドラマをテレビで見た。風光の麗しいものであり、最後まで見てしまった。上のように考える一方で、私は、すべてを投げ捨てただひたすらに坐わり、旅する人生がわかる。そこに人間のひとつの真実がある。種田山頭火もまた、私が一九七一年の秋に見たものを、もっと深い人生を背負って、見たのだ。「落葉ふる奥ふかく御仏を観る」「みほとけのかげ私のかげの夜をまもる」

日常活動のまっただなかで、どんと坐れるならば、そこに道はひらけるのだ。新しい力が生まれてくる。これまでの人生を真っ直ぐに生きてきたところに生まれる力だ。

◆一九九〇年五月十六日

十三日に徳田球一を偲ぶ会で山宣の墓参会をした。善法の墓地に参った。雨も上がり、新緑の丘の山肌を五月の風が吹きぬけていくなかで、偲ぶ会の面々とひとと

を過ごした。帰りには、皆が母の墓に参ってくれた。

◆一九九〇年六月三日

五月三十日の朝、前日の混沌としたなかから、目覚めとともに、基本的に次の考えが明確になった。

私は、かつて七〇年代初頭に、自分自身の内部に存在したブルジョア的な知の持つ根源的な非人間性に目覚め、それまで考えていた人生の方向では最早一歩も前に進めなくなった。そして、北白川の風土のなかで実現した転換を経て、真の人間性と真に人間的な人生を求道してきた。

根本的で根源的な非人間性とは何か。それを「本質的な人間精神の分裂」としてとらえた。その根本原因は結局は労働が人間にとって真の人生の意義とならない社会、ということである。始め私は、それを個別日本社会の人間精神の分裂としてとらえ、その後ブルジョア社会の分裂としてその本質を理解した。

そして私は、問題を根本的に、可能なかぎり大きな枠組みのなかでとらえ、自らの進むべき方向をその大きな枠組みのなかで確定しようとしてきた。唯物論の立場を獲得することによって問題をいっそう根本的にとらえることができた。

私がこれまで追求してきたことは結局それは「新しい人間」、すなわち『階級的人間性、革命的ヒューマニズム、共産主義的人間像』そのものであった。ブルジョア的な退廃に対する闘争であった。これは決して人民権力樹立のあとから人間の問題となるのではない。人民権力とその内実はブルジョア独裁に対する闘争のなかで下から成長するのである。すなわち、ブルジョアジーの非人間性に対する闘争そのものが「新しい人間」の創造でなければならない。

毛沢東は文化大革命を発動して修正主義と闘い、闘いのなかでその対局に新しい人間を創造しようとした。その原型はすでに、湖南における根拠地建設時代に形成されていた。ただ、毛沢東にあっては共産主義的人間の創造として自覚された目的意識的なものではなかった。

私は、この問題に対する目的意識的な追求に、自らの人生をささげたい。それがいかなる内容をもつのか、それはわからない。すべては内因論であり、まず自らの思想として準備されねばならない。

私は一九七一年の秋、九月二九日に、あの転換のあとで「今はただ、この出発点にまで戻ってきた自分を注意深く、静かに、確固としたものとし、そして、ゆっくり、出て行かなければならない。世俗のあらゆる事にも、或いは学問でさえ、その深い歩みとは、直接の関係はないのだ。自己を、そのように鍛えねばならない。その直接の関係ないものを、けれども一つ一つ試練として、またその深い歩みをより確かなものとするための機会として、誠実にうけいれてゆこう」と書いた。「深い歩み」は上

述のこういう意義をもつことであったのだ。ここに至って思う。党とは、歴史に対して、現実に対して、人間としての根本的な誠意をもって生きることそのものであり、そういう人生を送ることであり、人間とはそれができるのであり、その故にそれは大いなることなのである。それは、組織の一員であるかどうかよりも根本的なことである。

◆一九九〇年六月十六日

何度も、一九七一年九月二十八～二十九日の日記を読み返す。あの時は本当に追い詰められていた。自分が高校生の時に選んだ人生の方向が、本当に自分がなさねばならないこととは違うことが、下宿をして考え続けることによって、はっきりとしてきた。苦しみであった。夏の休みに、考え続け追い詰められていった。ではどうすれば良いのか。それは、まだまだわかってはいなかった。その時に、あの北白川の風光に出会い、たった一人の自己として自己の全歴史と向いあった。八十九年の三月二十三日に書き記しているように、これは人間の真実なのである。真実から出発して求道の道を歩んだがゆえに、その結論は、マルクス主義と党になったのである。

あの時、自己の本来の面目、「父母未生以前の本来の面目」に向きあえたか。それは、そこまではいかなかった。ただ、歴史のなかで正しい人生を歩む一歩となったし、あの時があったからこそ、あのようなところにいた自分がここまで来ることができた。このことに満足している。

だが、あの時に残してきた課題に、ある意味では今、直面している。「父母未生以前本来の面目如何」。この問に答え得たとき、そこに広がるであろう世界は、あの北白川の風光に出会って湧き上がった懐かしさよりも、はるかに底が深く温かく、懐かしいであろう。今はまだ、ただ待つのみである。

わが人生は、随分と簡明になった。知識人の複雑さが拭われてきた。この簡明さを力にしたい。そして全身で残してきた課題が開けることを待ちたい。それ以外に、自己の使命はない。今一番心残りは、家族のことである。

◆一九九〇年九月二十日

台風が過ぎていった今朝は、空気の澄んだ静かな秋晴れである。思えば、一九七一年の秋の、あの転換も、このような台風一過の秋晴れの時であった。あの転換は自らが育った日本の風土への回帰であった。それは人間の現実に立ち返って再出発しようとしたかぎりにおいて重要な意義をもっていた。だがあの時の思索は、風土への回帰を通りぬけて人間の普遍的な真実にまで立ち返ることは、できていなかった。あの年の秋以降、普遍的な真理を求めて思索と行動を重ねてきた。それはまちがいない。それがこの二十年間の課題であったのだ。そして事

実、あの時の転換を出発点にして、みずからを党に高め得た。

以来二十年である。今考えていることを整理したい。結論を言えば、宗教を止揚しなければならない、ということである。とりわけ仏教である。そしてそれは、人間の本史たる共産主義の時代の新しい人間の創造にとって不可避なことである。人類の最後の社会は共産主義社会であり、この時代から人類にとって真の歴史がはじまる。

人類は必ず新しい歴史、新しい社会としての社会主義と共産主義を実現する。科学技術の発展と生産力の発展は近代労働者階級を生み出し、この土台は人間の意識を変えていく。その変化する意識の本質は社会主義と共産主義への指向である。そして唯物論の示すとおり、存在が意識を決定する。つまり社会がかわれば人間もかわる。新しい社会経済制度のなかから、まったく新しい型の人間、協同意識にめざめた社会主義的人間が歴史に登場する。人間は教育され、新しい型の人間となる。このときからマルクスが共産党宣言でいうとおり、人類の新しい歴史、本当の歴史がはじまる。

だが、土台ができれば自然成長的に新しい人間が生まれるのではない。連続革命のなかで、ブルジョアジーによる人間性の破壊に対抗して、新しい人間を創造していかなければならないのである。「新しい人間」、すなわち『階級的人間性、革命的ヒューマニズム、共産主義的人間像』に満ちた人間の本史の内実を創造していくことは、人民権力樹立のあとから人間の課題となるのではない。人民権力とその内実はブルジョア独裁に対する闘争のなかで下から目的意識的に成長させるのである。この時に、宗教の止揚は、やはり決定的な意味をもってくる。

マルクス主義の宗教に対する基本見解は明解である。

「人間が宗教をつくるのであって、宗教が人間をつくるものではない」（マルクス『ヘーゲル法哲学批判・序論』一八四四年二月）。

「宗教は悩めるもののため息であり、非情な世界の情けであり、精神を失った状態の精神であり、それは民衆の阿片である」（同上）。

宗教は階級社会における人間の疎外の反映であって、その社会では

「人間的本質が真の現実性をもっていないための、人間的本質の幻想的な実現」（同上）

がなされる。すなわち、宗教は疎外された人間の自己意識である。

「この国家、この社会が、それが逆さまな世界であるために、宗教を、すなわちあべこべな世界意識を生みだすのである」（同上）。

ひとたび生みだされた人間の創造物としての宗教は、

「社会的諸関係の発展によって、それらは、人間を支配するところの、そして結局は人間のおのれ自身に疎外するところの、諸々の力になる」（マルクス『経済学・哲学草稿』）。

すなわち、宗教は、あべこべな世界意識である。

まさにこれは、現実の宗教であり、この規定以外にない。従って宗教に対する態度は、

「宗教にたいする闘争を抽象的＝思想的な説教にかぎってはならない。このような説教に終わらせてはならない。この闘争を、宗教の社会的根源の除去をめざす階級的運動の具体的実践にむすびつけることが必要である。……現代の資本主義諸国では、この根源は主として社会的なものである。……働く人びとに加えられている資本主義の盲目的な力に対する、この勤労大衆の外見上のまったくの無力さ、これが現代の宗教の最も深い根源なのである。……大衆がこの宗教の根源にたいして、すなわちいっさいの形態における資本の支配にたいして、自ら団結し、組織的に、計画的に、意識的に、闘うことを学ばないうちは、どのような啓蒙書も、この大衆のうちから宗教を駆逐することはできないであろう」（レーニン『宗教に対する労働者党の態度について』一九〇九年五月）

ということである。

問題は、釈迦や道元が人間として出発し、求道の末に真理をみずからのうえに顕現させたことを、われわれはどうとらえるのか、ということである。釈迦、道元が自分の場合深く学んできた具体的・歴史的人間である。

釈迦、道元の〝悟り〟は歴史的事実である。われわれとは断絶した個人的・神秘的なこととして、われわれの思索の範疇から追い出してしまってはならない。「人間的本質が真の現実性をもっていないための、人間的本質の幻想的な実現」であるとするならば、幻想的に実現されたことの本質は何か、ということである。まさにそれは決定的に幻想であった。出家するということはすなわち幻想である、ということである。だが当時はそれ以外に真の求道の道はなかった。真の問題は、その幻想のうえに実現されたことは、いかなる人間の本質なのかということである。人間的本質が真の現実性をもつ社会の建設は自然になされるものではなく、目的意識的な創造が必要である。それは土台たる共産主義生産関係の建設と、その一方における上部構造としてのそれを担う人間の意識、文化の建設が必要である。とするならば、〝悟られた〟人間の本質を明らかにせんとする思索の意義はかぎりなく大きいのである。なぜなら、われわれは階級社会のなかで達成された人類の成果を継承しないかぎり、新しい社

会の建設はありえないのである。

現在の自分自身のこの思索が実りをもたらすのか、もたらさないのかわからない。しかし、まず何よりも、真理をみずからの上に顕現させたいというこのことが、わが人生の原動力であったし、この求道がいわばわが人生の根幹である。そしてまた、二十年前のあのとき以来の内面における思索が、現実においては、党への結実をもたらした。人間にはこのような思索と求道が必要なのだ。求道は過程であり、いかに無心に原則的に歩み得るか、である。やはり、いかなる結果も期待しない態度のうえに、この思索を深めきりたい。

◎釈迦、道元の求道（発菩提心）の根底には、階級対立と階級闘争がある。釈迦は、奴隷制社会の小国の王子であり、大国からの侵略を受けんとしていた。その階級的没落の予兆を人間存在の「不安」として受けとめそこからの解脱を求めた。道元もまた、古代奴隷制の崩壊期に下級貴族の子として生まれ、幼少期の苦難から確固とした真理を求めた。釈迦、道元は、人間として真理を求め、修行し、真理を得たのである。これは歴史的事実である。

われわれはまさに、人間の本質が真の現実性をもつ社会の建設のために闘っているのである。その党である。故にわれわれは、この人間の本質を自らの実践と闘争のうちに自覚することができる。その可能性がある。自分自身にあってこれはまだ現実性になっていない。

このことばの内容は、「偶然的、個別的自己を脱却して、発展する物質としてのこの世界の法則に則った人生を生きよ。その法則は、哲学唯物論と弁証法、史的唯物論そのものである。その人生態度は『われわれの決意』である」ということではないか。だが、真に脱却すること、そのような自己を完成することは、また別の問題である。

マルクス・レーニン主義は真理であり、党はその実践である。従って、現代が失った人間存在への問いかけを自分自身の問題として追究し、真理を追求するものは、まず党でなければならない。革命的実践こそ、真の創造の土台である。

やはりこの結論に達する。　だがもっと考えねばならない。

◎これは新たな二十年の出発である。この二十年の内外の激動を原則的に闘い抜き、自らの内部を鍛えあげたい。

◆一九九〇年十月十二日～十六日

いくらかの時間を得て、心を内面に集中させることができた。これまでの思索を一歩踏みだすために、『新しい人間の建設』と題して系統的に考えを深めることにした。しかし、ただちに壁である。頭の先のことではないのである。あるいは単なる知的なことではないのである。宗教の総括と何度言っても宗教が総括されるものではない。

自分自身に即して、一から、内面からすべてを点検し直さなければならない。『仏道をならふというは、自己をならふ也』。まず、この一節である。己を見つめよ。真理はそこからしか明かとはならない。では、この自己の内面のどこに何があるのか。この自己は党である。では一体それはいかなる意味をもつのか。何が、党なのか。党とは何か。党は真理の現実化である。それはいかなる意味を持っているのか。

このように考えるとき、やはりまだ人生の軸が定まっていないということを確認せざるをえない。

共産主義人間の創造、その方向、その内容の発見と創造というこの問題が、これまでの自分の思索と求道の本当の意義であるとつかみ直し、自己の前半生を後半生の課題と結合させたことは、絶対に正しい。世界がまさに大破局、大動乱と根本的な再編成に向かっており、それが結局は共産主義へ向かわざるをえないものであること、修正主義、反スターリン主義の大合唱のなかで、真理がわが方にあることもまた、はっきりとしている。

しかし、まだ求道は本当の切実さをもっていない。仏教の出家は幻想であると今の自分は言いうるのか。現実の中にありながら、主観的には出家と同じこと態度で考え、また行動する、そういう態度をとってはいなかったか。これまでの前半生は実際そのような人生であったのではないか。その幻想のなかで真理の一端をつかみえたのは、まったくの偶然に近い。いや、改めてこの真理をもう一度点検することが必要である。この幻想的な人生態度はまだ根本的には転換されていない。一歩前進したのなら、一歩人生態度が変らなければならない。人生の基本的態度、基本構造が根本的に変らなければならない。

現代、つまりは階級社会から共産主義社会への大転換期における求道はいかなる内容そのものであり、いかなる原理的構造であるのか。そして、その求道を生きることが新しい人間の創造そのものであるという、基本的な路線を明示しなければならない。この課題はもはや幻想ではない。ここから出発して、明確な陳述をなすことが、幻想的に実現された真理の本質を、転倒を逆転させて真理として体現させることなのである。

手紙から

一九九五年の一月十七日、阪神淡路地方に大地震が起こった。これは阪神地方に住むのもにはまったく大地震だった。それからいくらもしない三月、まだ震災の後も片づかないうちにオウム真理教によるサリンテロが起こった。そしてその後一九九七年には神戸で十四歳の少年による連続殺人事件が起こった。この丸二年の間の出来事は、いかに現代の日本が人間の世として底のない深い闇をかかえているかを明らかにした。

私は、一九七〇年から七二年に日本社会の荒廃を言語の水準でつかんだ。そして人生をいささか転換させたが、そのとき問題として考えたことは何ひとつ変えることはできていなかった。むしろ逆にその荒廃は深まり続け、それがこういう形で現実化した。

転換以降、いささかでも世の変革の渦のなかに身をおこうとして携わった運動は、思いにおいて世の変革をめざしながら、結局のところ根なし草であった。変革の思想は日本語世界の奥深いところからのものではなく、人々の心の奥底には届かないものであった。かつてはこのように考え転向した人間が多くいた。転向の真の総括は、思想の根を深く下ろすことである。近代日本の根のない思想は、根こぎにされたのではなく、もともと根がなかったのだ。

このようなときに阪神大地震が起きたのである。自己と時代に即して内からそしてはじめから考えよ、これが阪神大震災が教えたことであった。

一九九六年に中央大学の野崎守英https://ja.wikipedia.org/wiki/氏と手紙のやりとりをした。拙い問題提起に丁寧に応えていただいた先生には心から感謝している。この交流をとおして、結局は自分のなかに考え切れていないものが多くあることを思い知らねばならなかった。すべては一からの出直しであった。

【第一信】――――――――――

拝啓

私は、先生の『歌・かたり・理』を読み終えたものです。突然に手紙を差しあげますことをお許し下さい。

私は、一月二十二日に、別の書籍を手に入れるつもりで書店に参りましたが、いくつか立ち読むうちに貴書に出会い、その場で購入し、一通りではありますが、一気に読んだ次第です。

これを読んだ機会に、自分自身の考えを深め問題を明確にするために備忘録を書きはじめましたが、問題が個人のことではなく、現代日本の社会と文化の問題そのものに係わることでありますので、私の考えたことを著者に送ることは許されることであるし、また必要なことであると考え、お手を取らせることになるのを恐れながら、こうして手紙とさせていただいた次第です。

私自身は、六〇年代末から七〇年代初頭の、いわゆる大学闘争の時代に学生生活をおくり、大学では数学を専攻しました。その後大学を去って、一時期は高校教員にもなり、左翼運動や労働運動に取り組んできました。数年前、現実の運動と闘いのすべてで転換を余儀なくされ、現在は予備校講師をしながら、やってきたことを省み、一からの出直しに向け

て準備しているものです。

まず、私が一見して惹きつけられましたのは、ひとことで言えば私自身のことばに対する問題意識と著者の問題意識とが共鳴するということでした。

私は、この二十年間、つねに「ことば」を意識して参りました。七〇年代のはじめの青年時代に、現代日本語が深く考える力をもっておらず、人間のことばとしては根本から再建しなければならないと思い至りました。卑近な例では、私自身、学生時代も労働運動のなかでも，立場が異なるものから、いわゆるレッテルを貼られ非難され、いかに対話しようと試みても対話が成立しないという経験に何度も出会いました。また、現代日本語の概念諸語が、日本語のなかで土台から互いに有機的に定義されあうということにはなっておらず、考えたことをことばで表現しても、それが日本語として定着した人間の経験としては蓄積されていかない、ということも深く感じました。大きな欠落感を日本語に対していだいてきました．日本人は日本論の大変好きな民族であるといわれます。それは、日本を意識しなければならないほど日本語に欠落が大きい、ということだと思います。

日本語は、古来より、古層のうえにその時々に外来のものを塗り重ねてきました。日本語世界は、近代に至り、とくに理のことばを、それまでの日本語の内部からことばを自覚的に発展させるのではなく、西欧語に対する漢字語を作りあげ、それでもってやってきました。西周らの啓蒙家が明治初期にそれらの漢字語を作りましたが、そのように根のないことばでの民主主義の啓蒙は底が浅く、西周自身、明治政府の反動化とともに、国権主義者に転向していきました。ことばは全体のなかに有機的にあるものであり、西周らがしたように個別の「ことの端（ことば）」を作りあげ切り貼りしても、それは有機的なものではなく、ことばとしての力、つまりことばに蓄積された人間の経験が逆に人間を鍛えるという力を持ちえません。

私は、一読して、「著者は、日本語の現状について自分と感覚が同じであり、人間とことばの真理を識っておわれる」と思いました。これが惹きつけられた第一の理由です。

第二に、著者は人間にとってのことばの重大性を深く識るのみでなく、日本語の現状を変革しなければならないと考えておられる、ということです。

青年時代の私には、この日本語の現状というものが日本の近代の現実そのものと重なり、自分はその全体をを根本的に再建する道をゆこうと決心しました。そして、ことばの再建は、この現実を変革する運

動と闘いのなかにおけることばとして再建される以外にないと考え、実践活動の道に入ったのです。そのような人生の転換を促す時代でした。

実際に社会的な運動をすることで身についたことのひとつは、「すべてなにごとも内部からの力で展開される以外にない。外からの力は契機とはなりえても真の力とはなりえない」という「内因論」の立場でした。ことばについていえば、ことばはそのことばで生きるものの人生の闘いを力として内部から自己展開して発展し世界を拡げてゆかねばならないし、そのようなことばのみが人間を内部から動かすことができるという、考えです。

しかし、二十年の経験を経て、問題の大きさに絶望的な気持ちを抱いてきました。

昨年の冬、阪神地方を大地震が襲いました。まさか、阪神間であのような大地震が起きようとは、思いもよりませんでした。私も西宮市の丘陵地帯に住んでいてこの地震に会いました。幸い自宅の被害は大きくはありませんでしたが、私の住んでいるところの近くで、道ひとつ隔てて西側は無事であったのに、東側は大きく土地がねじれて側道もおしつぶされ軒並み全壊し、死者も何人か出たというところがありました。この違いは、西側は昔からの台地であったが、東側は江戸時代までは浅い谷筋で、明治になってから埋めて畑としてところであったのです。この二十〜三十年の間に宅地化されてきていたのです。

これは教訓でした。現代の日本語はまさに埋め立てたうえに構築したものそのものです。このようなことばとそのことばによる社会と人生は、大地震に比較すべき歴史の大転換期には、それに耐えることができず崩壊するということです。地震は、日本の近代を根底から点検し直せということを提起しました。

私は、自分自身の社会活動をふくむ一からのやり直しを、こういう人間とことばの土台からの再建とそれに対応する日本社会の人間関係の再構築、という方向でおこなわなければならないと考え定めました。地震に出会い、これまでのように絶望的な気分ですますのではなく、自分自身の課題としてなしうることはしなければならないと考えたのです。ですから、「日本語内部からの可能性の掘り起こしとして理にかかわる場の方向を求めるとしたら、どんな道筋が考えられるのか」という著者の問題意識に心から共鳴したのです。

第三に、ことばは、ことば自体として再建されるのではなく、結局はこの問題を自覚して問題とする共通の意識の場を構築しつつ、そのなかで自己の人生そのもののこととして「ことをわる」以外にありません。「理については、やるのなら自分が自分の考

えることとして展開する道を求めるしかないのだろう」という認識に、あらためて「このひとはことばを識っている」と思いました。この人が何を言っているのか読んでみようと思いました。

私自身、学生時代は数学をやろうとしていました。しかし、数学が日本の文化のなかでは外来のものであり、文化に深い根をもっていないという意識が少しづつ大きくなり、ついにはそれに耐えがたくなりました。問題の根本は、日本が近代になって自らの土台というか古層と断絶して西欧文化を上塗りした事実、またそれですませる日本文化そのものの質、です。数学は科学技術や経済運営の基礎として必要なものになっていますが、西欧文化において数学が文化の軸として占めている位置と役割を、数学は日本の文化のなかには占めていません。ギリシアの魂そのものとしての数学精神は、非西欧の日本の土壌には文化としての根をもっていないのです。あくまで技術としての位置を占めているに過ぎません。

近代に西欧の文物を取り入れたことは、当時の西欧帝国主義に対抗するためのひとつの選択ではありました。西欧諸国の軍事的優越性が根本的にはその社会や思想のありかたに根ざすものであることを自覚したがゆえに、西欧近代を日本に接ぎ木しようとたのです。西欧の文物を移入する、そのために西欧語に対応する日本語を漢語から作った。一つ一つが内部から定義されるという時間はなかった。一つ一つ定義するしかなかった中国文明ではそのために動きか遅くなり、帝国主義の半植民地となった。しかし、こんどは日本が、西欧を上塗りしたまま自らがアジアに侵略しました。今日に至るもその歴史に決算をつけていません。

私は、そのことと、現代日本語が理のことばとして人間を深部から動かしえないこととを、表裏一体の日本の現実としてとらえました。ならば、この近代日本の根本からの変革の実践に身を投じ、その実践のなかのことばとして、日本語を再生させる以外にない、これが私が大学を去り、実践活動に入っていった内因でした。こういう疑問を抱いた以上、自分に才能が無いこととあいまって、数学者としてやっていくことはできませんでした。

私はこれまで、自分の内部にあることばと人間の本来のありかたへの思いと、それに対する現実の日本語世界でのことばと人間のありかたの現実認識とを、わかりあえる人には出会いませんでした。そういう出会いはあきらめてきましたが、先生の著書を拝読し、やはり問題意識を共有しうる人はいるのだと思いました。

このような次第で、その場で判断しすぐに購入し

ました。いくつかのことをそこから学びました。

まず、私の、「近代日本語が人間のことばとして、考える力をもっていない」という認識は、より具体的には「うたとかたりをことわる力が弱い」という事実としておさえるべきことなのだ、ということです。かくし味といわれていますが、この事実を明確に言明した人は他にいないと思います。西欧言語論のうわべに学んだ根なし草の言語学者にはできないことです。この問題を問題として自覚できるためには、ことばの「うた・かたり・ことわり」という三つの側面とその相互関係という構造的な認識が必要であり、そのためには移入の言語論ではなく、日本語の歴史的現実に密着した考究が必要だからです。さらにこの事実は、日本語に固有のことではなく、普遍性をもつと考えます。つまり、この「うた・かたり・ことわり」の三側面は、いずれの言語においてもあり、この三側面の相互関係がそのことばとその文化の基本的な構造を定めているということです。このことは、厳密に立証しているわけではありませんが、確かなこととして貴書をとおして学びました。日本語の現実に立脚して言語の普遍性に至る道が、この本のなかには用意されている、ということです。

第二に、「かみ」をどのようにうたい、かたるのかという構造が、ことわりの位置と役割を定める、ということです。西欧文明は唯一の神を生み出しましたが、これはことばが主語と述語を軸として、しかも主体としての主語を先行させるものであるがゆえに、絶対主語としての神へ向かわせる力が内在していた、その結果である。日本語の「かみ」はそうではなかった。西田幾多郎は絶対述語としての場所の論理を構成しようとしましたが、これは日本語に内在する力がその方向に促したと言えます。その同じ力がうたの世界では連歌へと向かわせた。　このように、人間が「かみ」ということばで何をいおうとしてきたのか、どのように「かみ」をいうのかが、いかなる自然との関係のなかでいかに社会を構築しいかに生きるのかを定め、「ことわり」の構造を規定する、ということです。西田幾多郎のその試みは成就したのか。連歌が歌の世界でことばの輝きを十全にひき出しているだけのものを、西田哲学はことわりの世界でひき出しえているのか。あるいは近代日本の幾人か思想家が「ものからことへ」とか「主語の論理から述語の論理へ」とかを標榜して、何かをしようとしましたが、その試みは成就したのか。この点について、まだ本当の総括はなされていません。貴書に述べられているように、ことばに内在する「うたとことわりの関係」の傾向性が、思想構造をどのように規定するのかを自覚化し、その傾向性に立脚

しつつ、傾向性から自由になって普遍性を獲得することは可能なのか。これはまだ答えが出ていません。

日本語の内在する傾向性さえ、その本質を明らかにするには至っていません。そのためには「ことをわる」ことについてのさらに深い考察が必要だと思います。「うたう」「かたる」はそれ自身が単一単語ですが、「ことわり」は「ことをわる」と合成語です。つまり、「ことわり」はより基礎にある言葉から合成されたものである、ということも学びました。歴史的に「ことをわる」から単一語が形成されず、単一語となった「断る」は「ことをわる」のひとつの側面をきりとったものでにすぎない、ということです。「断る」が「ことをわる」のひとつの側面であるということ自体は、著者も注目しておられたように、大変重要なことですが、ひとつの側面であって全面を単一語化することがなかったというのも事実です。ここには、「ことをわる」ことが「ひとつの概念」に成熟していない、という側面があります。あるいは「ことをわる」ことはひとつの概念になるものではないのかも知れません。

これは、私が貴書より勝手に読みとったことで、先生のお考えの方向とは違うかもしれませんが、私にとっては、これはこれから自分の考えを延べてゆくための大きな示唆となりました。

第三に、実践的な問題です。私は、兵庫県で高校教員をしていました。七〇年代さまざまの日本近代の矛盾を背負った高校生が、自分や親の生きてきた道を「かたった」のです。教師自身が「かたりの作風」と言っていましたが、これは兵庫県下の教育運動のひとつの特徴ともなっていました。高校生は「かたる」ことで自立する。しかし、指導する側の「ことわり」がなければ、かたること自体が自己目的化し「もの語りはしても生き方は変らない」という事例にいくつも出会いました。「ものがたり」は原初においてはいのちの噴出です。しかし理のことばかいのちの深みに届いていない現実にあっては、「ものがたる」こと自体が自己目的化してしまい、現実を変革する力を失います。日本の作文教育には、教員個人の責任の範囲をこえる問題ではありますが、この共通の根本的な弱点があります。

私は、貴書を読むことで、経験的に知っていたことを、まさに「ことわる」ことができました。

さらに、西田幾多郎の解読をとおして学んだことは、「ことわり」の水準で近代日本の思想を読みとかなければならない、ということです。「ものがたり」として思想家を解説する書物は枚挙に暇がありません。しかし、ことわりの水準で思想が真に総括されたことはないといってよいと思います。私は、貴書

をとおして「ことをわってよむ」という問題を深く自覚させられました。

西欧語では、「ことをわってよむ」力が言語に内在しています。あるいは西欧社会に内在していると言うべきかもしれません。いずれにせよそれは歴史的に形成されたものであり、産業革命をはじめとする近代が西欧にはじまった内因もここにあるかと思います。ただ、それは西欧語に内在しているがゆえに、西欧人に自覚されてはいません。近代になって西欧を移入しようとした日本人が、西欧語に内在するこのことに無自覚なまま移入しました。しかし、日本語と日本社会には、この「ことをわらせる」力が内在していません。ために、移入したつもりが表面だけのことに終わり、結果として現代日本語が荒廃の極に至りました。しかし、ものには表裏があります。われわれは今日、「ことをわってよむ」ことの意義を自覚しています。方法論としてさらに高め普遍性を持つことができるならば、逆に深部から世界文化に貢献できる、と思うのです。

貴書からこのようなことを学びました。

さて、にもかかわらず、現実の日本語はまったく困難のまっただなかにあります。

何より私は、先に述べましたように、現代日本語は、理のことばがいのちの深みに届いていないと思います。これが私の第一の現状認識です。昨年はオウム真理教の問題がありました。オウム真理教は最後には、薬物と頭皮からの電流で教祖とおなじ心理状態を獲得しようとし、極端な心理主義となりました。この、心理状態の実現そのものを目的とする傾向は、当初からありましたが、それは真理を悟ることとは無縁なものです。また、現実の物質の力で一定の心理状態を得ることが修業の目的なら、すべてはこの世界のなかで成就できることに過ぎず、本来宗教がもっている現世への根本的批判がなくなります。にもかかわらず、青年が、あのような荒唐無稽な宗教にはしる根源は、日本語の理のことばが、人間の生き方を深く動かすことができないという日本社会の根本構造に根ざしています。先人の智慧が蓄積した生きた理のことばが育っていないからだともいえます。

第二に、現代日本では、理のことばを耕すべき人間が、耕していないということです。例えば、『現代思想・入門』（宝島社，1984）という本があります。そのなかの「ヘーゲルの体系」という解説のなかで、編者は「ヨーロッパの知的な累積は、ヨーロッパ人にとっては精神の土壌そのものであり、輸入された概念を使って思考する私たち日本人にとっても知ら

ず知らずのうちにことばを規定しているコンテクストである。ひとつの概念はその概念だけでは意味をもたないのだから、わたしたちはヨーロッパ的な概念を誤用していることもあれば、無意識のうちにこの概念のもつ潜在的なコンテクストにしたがって思考しているときもある」と述べています。この書は比較的日本ということを意識している良心的なものですが、にもかかわらず、この一文のなかには、現代日本の知的状況の荒廃がそのものとして顕在しています。「知らず知らず」に規定されたことばを「誤用」したり、「無意識のうちに」、つまり明確な定義なしに用いるということが日常化していることは事実です。が、ここで知的荒廃というのはそのこと自身ではありません。

編者は自分を「在野の哲学者」としています。しかし、「誤用」とか「無意識のうちに」とか言いながら、なぜ次に進むことができるのでしょうか。そこをそのままにして次に行けるのは、単なる評論家であって哲学者ではありません。哲学とは、このような荒れ地に来たならば、そこを耕し人間の土地にする人でなければなりません。哲学者とは、理のことばを自己の人生をかけて耕す人でなければなりません。編者はフランス思想の紹介をしていますが、少なくともフランス人は、ことばをもっと大切にしてきた。荒れ地を耕してきた。「哲学者」と自己を規定する人にして、この現実である。これはまさに知的な荒廃ではないでしょうか。フランス読みのフランス知らずの知識人が何と日本には多いことかと思います。

日本では理のことばを内因論の立場に立って内部から発展させるという根本が社会の共通意識として打ち立っていません。つまりことばと社会に「ことをわる」力が内在していません。それを自覚しないまま西欧語に対する漢字語を上塗りしたことによって、現代日本語は荒れ果てました。知識人は、この荒れ地を耕すのではなく、埋立て上塗りのうえに上塗りをしてそれらことばの相互関係だけで何かを言ったつもりになってきたにすぎません。いざとなれば自分自身は根拠を求めて西欧語の原典に還るのです。しかし、西欧人こそ、むしろそのような根なし草と闘い、内部から理のことばを育ててきました。それが西欧文明です。とすれば、近代日本の知識人は、西欧を根本的には「知らない」のです。これが第二の私の現状認識です。本当に他者を知るためには、自らのこととして内部から知らねばならないのです。

一九〇一年、二十世紀が始まったときに中江兆民は「わが日本、いにしえより今に至るまで哲学なし」（『一年有半』）と言いきりました。以来百年、兆民の

この遺言は、そのまま現代日本の課題として残っています。

第三に、このような現代語に潜む問題は、必ずしも日本だけの問題ではなく、非西欧社会の現代化の根底にある問題として普遍的であります。韓国でも、中国でも、われわれと本質を一にする問題が、その現象形態は違っていても、存在しています。

さらにいえば、西欧近代の問題でもあると思います。西欧においては問題として自覚する必要のないことが、われわれにはまことに痛切で切実な問題です。日本の現実の問題に真摯に取り組むことは、西欧人には理解しえない西欧近代の問題を人類全体の普遍的な問題として対象化することとなるはずです。問題は普遍的だ、これが第三の私の認識です。ただ、日本人の自意識はいつも「西欧にあって日本に無い」という欠如としての認識です。私がここで述べたことも、基本的にその範疇です。しかし、もともといま考えているようなことは西欧にも無いのかもしれない。内部から社会の変化に対応して必要性が出てきたことを欠如として認識するのは後発の近代社会としての日本の特性であって、その点に特徴があっても無いことは西も東も同じなのかも知れません。この点を明確にしなければ本当の普遍性は実現できません。

以上のような現状認識を、私は貴書を学ぶなかで持ちました。

現状を改めてこのように認識するとともに、貴書に学んで、これからどうしていくのかを考えさせられました。私は、なににせよ日本の現実から出発しなければならないと考えます。現代日本語のありようとそれに表象された現代日本の人間への批判それ自体が、現代日本語をもってしなければなりません。百年前に中江兆民は遺言ともいうべき『一年有半』、『続一年有半』で日本語をもって日本語社会を批判しつくしましたが、このような近代日本の良心ともいうべき経験を継承しなければならないと思います。ことばは取り替えがききません。

このような仕事は、実は日本という個別性に立脚して普遍性を獲得することだと思います。「現にある世界のうちにあるその構造を見ぬくことで未来を透視できるような視点を立てないことにはやはりどうしようもない」という言葉に深く共感します。私はそれは、現代日本の荒廃の真因を「近代日本の経験」として自覚化・対象化して、はじめて実現されるのではないかと思えるのです。現代日本の荒廃を深部でとらえきり、それを乗り越える思想として、実現されるしかないと思います。またそれは必ず可能であると信じています。

このような仕事は、それ自身がことばをうみだすことであり、そうであるなら、そのための共同の場がいるのではないか、と思います。やはり共同の力で人間の経験を蓄積しつつ、ことばとことばに現れた日本人の人間関係を、再構築していくということでなければなりません。そのような場はあるのでしょうか。先生が言われましたように「存在しなかったことが具現する場面」を、目的意識的につくりだしていくことが、求められているのだと思いました。そして、それはまだ無い、と思います。

以上、勝手なことを書きつらね、貴重な時間をとらせてしまいました。もっと貴著に密着した感想を述べるべきところ、貴著を読むことを契機として考えたことの一方的な陳述となってしまいましたことをお許し下さい。また、素人のとんでもない読み違いがあり大きな失礼をしているかも知れません。もしあれば、ご容赦願下さい。

私自身は、ここでまとめることで、展開するべき幾つかの課題も明確になりました。自分自身の問題として取り組むつもりです。

読みとおしていただきましたことに感謝しつつ筆をおきます。最後となりましたが、先生のご健康とますますのご発展を心より祈念申し上げます。

敬　具

一九九六年二月二十三日

【第二信】――――――――――――――――――――

拝復

私の突然の感想に対して、ていねいなご返事をいただき、ありがとうございます。ご推察のとおり、私は、昭和二十二年生れの団塊の世代のものです。

私の「悲観論」に対して、先生が「これはひどい、と考える人がでてくる条件かえって与えられている」と言わましたことは、まったくそうだと思います。マルクスが『経済学批判・序論』で「課題を解決するための物質的条件がすでに存在しているか、すくなくとも成立の過程にある場合にだけ、課題そのものが生まれてくる」と述べていますが、今「基盤のところから日本の地ならしをする」ことが課題として生れているということは、その解決の条件が成立しつつあるということだ言えます。とはいえ、解決を現実のものにするためには、解決しなければならないという内部からの切実な要求が必要であり、その力は、逆説的ですが現実に対する根本的な否定から生れてくると思うのです。私は、問題の第一歩は、現実の何を根本的に否定し何を解決しなければならな

いのかということを明確に言挙げしきること、つまり問題の設定であると考えています。問題を結晶させ真に設定することを、私自身の課題として取り組んでみます。私はまた、同世代のものほど「戦後民主主義」に否定的ではありません。当時から、戦後民主主義に否定的であった新左翼に対して、「新左翼の存在自体が戦後民主主義を前提にしているではないか」という批判を持っておりました。

さて、先生はお手紙のなかで、宗教の問題に関して〝歌〟〝語り〟〝理〟のかかわりがどうなっているのかを、空海、道元、説話集、御詠歌などをとおして検証するとの課題を述べられました。この点に関しまして、一点私が先生の御本のなかで違和感を感じたところがありました。自分の読み取り方が間違っているかもしれないとの気持ちがあり、前の手紙では迷ったうえで書かなかったのですが、空海、道元がお手紙のなか出ててきましたので、思いきって述べてみます。それは八六頁の「空海でも道元でも理の表現の側に立つことになったのは、中国からの刺激を主要な契機としてであった」という点です。

私は、生れ育ったところが京都の宇治で、そこには道元開山の興聖寺があり、宇治川東岸は小さいころからの遊び場所でした。そんなことから、正法眼蔵の世界に実感として強く惹かれ、大学に入ったころは京都相国寺の僧堂に参禅してきました。相国寺は臨済宗ですが、そのとき老師が提唱に使われたのが正法眼蔵で、昔の三巻本の岩波文庫の正法眼蔵を繰り返し読みました。正法眼蔵はわかりませんでした。参禅のほうも大学闘争の高揚の波にのみこまれて途絶えてしまったのですが、このときに学んだ道元の求道精神の非情なまでの厳しさと、春夏秋冬、とりわけ真冬の僧堂での座禅が、その後の自分の生き方の背骨となりました。

私は、道元の発心・求道はまったく内部からのものであり、さらに天童山での道元の経験は、「中国からの刺激」ではなく中国や日本という文化の制約をこえた普遍的なもので、如浄もまた、普遍的な立場から道元に法を嗣いだと思うのです。道元は自分の経験を述べるために、自身は堪能であった中国語を漢文として使うことはしませんでした。中国語に堪能であっただけに、漢文式日本語の叙述に入り込む理の空白を道元は十分に認識していて、そうしなかったのだと思います。道元は、当時の日本語の枠組みのなかに中国語から漢字語を切り取って、独自に自己の経験に裏打ちされた意味をもって配置する、という方法をあみ出しました。当時の日本語の条件のなかでそれ以外になかったのだと思います。「而今の山水は、古佛の道現成なり」というこの「而今」を、

他に訓読みしうる表現で言うことはできなかったのだと思います。言葉をこえた普遍性を獲得し、言葉からも自由な地点から逆に言葉を駆使したのではないでしょうか。ですから私は、正法眼蔵は「理にかかわる表現が自発的に発生した」数少ない実例であり、日本語の現実に立って普遍性を獲得する可能性を示すものだと考えたいのです。

正法眼蔵の言語世界については、寺田透が詩人としてその世界を切り取ろうとしましたが、理の世界に切り取ることは本当のところなされていないと思います。森有正がパリの東洋語学校のテキストに正法眼蔵を使ったということが、彼自身の文章のなかに見えますが、それ以上のことはわかりません。理の世界から道元の世界を読み取ることは、道元が示した可能性を現代に甦らせることであります。先生が先の八六頁で言わんとされたことは違うことで、私が取り違えているのかもしれませんが、この叙述に違和感を持ったのは事実で、それはなぜかと考えてみた結果がここに述べたことです。素人の感覚として、受け止めていただければ幸いです。

三月十日の朝日新聞の朝刊で詩人・評論家の北川透氏が『『オオム』の深層に言葉は届くか」と題して書評を述べ、結論として「どれを読んでも欲求不満が残る」という言い方で「届いていない」と言っています。私が、現状認識として「現代日本語は、理のことばがいのちの深みに届いていない」と言ったことと同じことをとらえているように感じました。「言葉が届いていない」との感覚が、共通感覚として成熟してきています。これを逆に言えば、課題が現実に存在している、ということだと思います。私も、自分なりに目的意識的に取り組んでみます。

先生の御本に触発されて、いろいろ考えることができました。心から感謝いたします。考えていくなかで、自分が断片的に述べたことや感じたことを深めまとめる必要を切実に感じました。予備校講師をしながらですが、時間をつくって数年をかけてみるつもりです。

言い尽くせないことが多いのですが、とりあえずはいただきましたご返事へのお礼とさせていただきます。季節の代り目ですが、先生のますますの御健勝を祈念申し上げます。

敬　具一九九六年三月十二日

【第三信】――――――――――――――――――――

拝復

空海、道元についての先生の御本の意図について、わかりました。仏教は、普遍宗教として、人間を日

本とか中国とかあるいはヨーロッパとかの地域性でとらえず、人間そのものに立ち返ろうとする本性をもっていますが、そのなかで禅は、同時に具体性を絶対に離れないという指向性をもっていると思います。自分が立っている場所からとらえきるという目的意識性をもっています。個別文化の特質を破壊せずにそのまま普遍性へ向けて底を抜こうとするものです。道元の身心脱落は、身－心であって心－身ではなく、まさに体が悟るもので、肉体の個別性や個別文化から離れることなく、普遍性を実現するものです。私は、道元は中国という個別のなかでこの普遍を学んだと思うのです。

現在あるところから超越した普遍性を立て、そこへ飛び出すことを求めるのがヨーロッパ文化の普遍、少なくともカトリシズムはそういう普遍性だと思います。禅は東洋の根源的智慧として、別の道筋を立ててきました。道元の言語世界はそれを表現する言葉として当時の日本語の土台のうえに道元によって造られた世界です。ここには日本語のひとつの可能性があります。その可能性をことわりの世界に再生させたいと切実に思います。私は、普遍と個別について禅がもっているこの智慧を育てねばならないと考えるものです。

道元も、法然や親鸞らの鎌倉仏教の創始者と同様、いちどは比叡山に入り、その形骸化を見て山を降りた人です。私が道元に惹かれるのはさらに、道元が「山を降りた」人だということがあります。自分が大学をやめたこととひきあわせて、そのことに共感するからです。

日本の学問的営みは、都市の、国家やその他の公と結びついた大学での学問と、それとは別の、山野を跋渉しあるいは市井に住みつつ、自然の原始的な生命力を土台する知性とが、併行し影響しあってきました。今昔物語によく「禅師」というのが出てきますが、あれは体制の学問を離れて山野を放浪する知識人の総称だと思います。空海もまた山野に入り、そのような人々から大きな影響を受けています。空海が得た自然のいのちの智慧ともいうべきものに、形を与え、普遍性を実現する契機となったのが、仏教でした。比叡山自身、最澄が、奈良の都市の学問を離れ山に入って仏教を内部からの地に着いたものとして開いたものです。が、平安時代の終わりころには、再び比叡山自体が体制の大学となり形骸化していました。

このように日本文化は、これは一般的にいって周辺文化の特質だと思いますが、権力を背景とした新式の文化体制と、その無内容と形骸化に飽きたらず、そこを出て山野を跋渉することで磨かれた智慧との、

対立と反発と葛藤を活力源として展開してきました。平安時代の「禅師」や中世の「禅律僧」とよばれる人々は、貴族やアカデミズムからは忌み嫌われてきましたが、庶民は彼らを頼りにしていました。原始的ではあるが生命力のある智慧をもっていました。私が大学をやめたときも、やはり私なりにこのような意味で「山を降りる」という感慨がありました。

私はその後マルクス主義者として左翼政党の専従活動もしてきました。その頃も私は、宗教から、宗教という外皮や外枠を取り払い、そこからより普遍的で根源的な智慧を引き出すことが不可欠だと考え続けていました。今は本当にすべてが一からのやり直しであり、そのやり直しは根本的です。私にとっては、まずマルクス主義を再建に向けて徹底的に解体しなければならないと考えています。ただ、今、やはり私はこの解体は再建に向けてのものであると考えたいのです。が、たとえその過程で、さらに別の途に入ったとしてもかまわないと考えています。

私は、内部で真に熟するまで「静かに沈潜」して待つつもりです。私には、今日までの時間はやはり必要なものでした。これからもまた必要なだけ待つつもりです。

何度かやりとりをさせていただき本当にありがとうございました。何か本当に言うべきことが私のなかから出てきましたなら、またお手紙させていただきます。また先生の方で考えを公にされましたら、ぜひ読ませて下さい。

ようやくに春となりました。学校も始まってゆく時節ですが、ご健康に留意され、ますますご発展されますよう心より祈念申し上げます。

敬　具一九九六年三月二十六日

大地震、オウム事件、野崎先生とのやりとり、これを通して私はもう一度はじめからやり直そう、と思った。自分の言葉が、やはり核心をつかんだものではないことを知らねばならなかった。内からあふれるように語ることはあるのか。これを考える場がほしい。

青空学園

私の出発は解放教育運動だった。26歳で大学院を辞め教員になった。はじめの六年間は地域の障害生徒の普通校への進学保障に取り組んだ。解放教育運動が、部落の子供の教育保障から、より広く教育権の地域における確立という普遍的な立場に立ち得ていたことを意味している。次の年、高教祖支部の支部長を務め、その後の六年間は、職場組合の委員長として地域の教育のための共同闘争に専念した。

もとよりこのような運動は紆余曲折であり、中曽根行革の流れのなかで、この高校を廃校にしようとする動きが加速し、最初に私と書記長が停職処分を受けた。これは後に裁判を経て撤回させたが、県の高校教員組合は、問題を民主主義や人権への攻撃と捉えることができず、職場の組合を支援しなかった。

職場にはさまざまの意見や運動の分岐があり、心から団結していたとは言い難い。そのなかで委員長であった六年のうちはじめの三年間は主導権をもってやっていたが、あとの三年間は担がれていた。その責任は私の未熟さにあった。当時の自分をふりかえると、属していた政治党派にあった形式主義を、どれだけ現場で克服できていたかといえば、十分ではなかった。

その年度末、私は党派の専従になるために退職した。職場集会を開き、自分のことを隠さずにいい、立場は変わってもともに闘うことを確認して認めてもらった。その夜だったか、私を担ぐ側の人たちが家に来て、やめることに反対し、説得に来た。しかし私は、こちらがやっていた対外的な諸関係を、これからは君たち自身でやりなさいということで、説得には応じなかった。

そのようにしてはじめた党派活動であったが、しかし結論としていえば、私の党派活動は、敗北だった。貴重な経験を多くしたし、いろんな人との出会いもあった。しかしいろんな意味で党派の活動としては敗北であった。

党派を離れまったく孤立して一からの出直しとなった。この時期、家族には多くの心配をかけた。これもいちいち記さないが、いまになって一層それがよくわかる。路頭に迷いかけたときに助けてくれたのが、前の高校の職場の同僚で、その後、彼も職場を離れ塾などで教えていた。お前は結局数学を教えるしかないのだから、と塾での仕事を世話してくれた。いろいろつてを頼り予備校でも教えはじめた。

その頃、予備校からテキストと解答を受け取って読んでみた。しかし自分の高校生の時のことを思い起こすと、こんな細々とした勉強はしなかったし、それでも数学は得意科目だった。もっと本質的なところをつかんで、自由に考えるということを身につけた方がいいのではないか。そう考え、自分で教材や教え方を工夫してやってきた。

日本の学校教育は、大きくいえば、生徒を賢くするのではなくただ従順にすることを目指すものになっている。良心的な教師の個別の努力によって学校は支えられているが、そういう教育に金はかけられないとなれば、廃校にする。最近も定時制高校などの統廃合が続いている。このなかで、せめて、自分で考えようとする高校生に、その一助となる場を造りたい。これが、私の置かれた場で何とか出来る最低限のことであった。それで、一九九九年夏より電脳空間に「青空学園」を開設し、日本語科と数学科を置いてこれを主宰してきた。

言葉と数学は文明の基本的な方法であり、土台である。現代においては人の土台そのものである。これを一つの文明の土台として統一的に掘りさげること。これがなされねば、その文明の近代は砂上の楼閣である。近代日本文明は、まさにこの問題を避けてきた。固有性を大切にしながら、普遍性を実現することはできるのか。あるいは固有性自体を展開し、近代的な普遍を乗り越えることはできるのか。このような問題意識のもと、固有の言葉と文化の土台を耕すことを試みようとした。これが青空学園日本語科である。

また、数学を教えて工夫した事々や、教えるためにその背景や土台を自分で勉強した事々、これらをウエブサイトに青空学園数学科として公開してきた。このサイトは多くの人の支持を受け、ここで学んだという人も結構いる。

大学をやめたとき、もう数学を勉強することはないだろうと考えた。しかし、それから四半世紀を過ぎて、再び青空学園数学科の読書会で数学の勉強をはじめたのだ。高校数学を見直していくなかで、言葉を越えた人の根底的な営みの一つに数学があることを再発見し直したことが、いちばん大きい動機だった。同時に、やはり数学は捨てきれなかった、というべきなのかもしれない。

かつて大学への進路を決めるとき、本当は理系としての哲学や言語学があれば、数学は趣味にとどめて、そちらへ行っていたかも知れない。文系理系の分離は日本の入試制度の根本的な弊害であり、その根は深い。ここは自分で考えた本来の知のあり方を、できるところからやってみようとして、学園という形をとったのだった。

自分のうちにあったさまざまの矛盾を、この青空学園の場で内面の対話として、ときほぐしてゆくことができたことは大きい。その軌跡が『対話集』である。

二〇〇七年、地震から十二年が経過し、六十歳になった。学生時代、教員時代、党派の時代、再び数学教師の時代、それぞれ、今思えば中途半端であった。一所に居続けることはできなかった。自分のなかにある問題意識と、現実の場でさまざまの関係のなかで実際にしていることの間に、つねに乖離があった。何をしているときも、問題はそんなところにない、という声が聞こえてくる。そこには、現実から逃避する意識もときに働いていただろうが、やはり問題は未解決のままだ。そのために、現実のことにすべてをかけることができず、遍歴放浪をくりかえしてきた。

それぞれの人にはかならずその人をして人としている言葉がある。それを「固有の言葉」とよぶ。人が人であることを成立させている言葉、つまり人の条件としての言葉、それが固有の言葉である。固有の言葉のうちから考えることをはじめなければ、人は人たり得ない。足下から言葉を耕していきたい。

現代文明における方法としての数学をとらえ直したい。文明を規定する数学的実在を少しでもつかみたい。数学は文明とともに古い。それが近代文明のなかで再発見された。西洋において再発見され、近代文明の根本的で基本的な方法となった。真の近代化は数学を発見しなければ、内発的なものとはならない。根拠を問い、公理系の構造を問う超数学的視点が数学自身を発展させる原動力の一つであった。この意味を考えたい。

哲学も数学も知識ではない。実践そのものである。人の判断力や批判力につながらない哲学や、「わかる」という経験ぬきの数学は数学ではない。この哲学や数学のもつ実践性こそ教育の柱である。日本の文教政策は明治以来一貫して愚民政策であった。国家の愚民政策に抗い、人民は自ら考える力を鍛えよう。国家から独立し、これを食い破るような、人民の自己教育の協働の場を作りたい。

現実の変革こころざす側からいえば、根のある地についた変革の思想は、まだない。われわれの側ですら、相も変わらず思想を外に求めている。私自身、さまざまの試行錯誤を経た。根のある変革の思想の決定的な重要さをかみしめている。ないときに、生み出されるまで耐える力が必要だ。なし得るところから、原則を譲らず、一歩一歩、である。歩みが遅く寿命が間にあわなかったとしても、それはよい。

このように考えることができる視座を、自己の存在として生み出した来たことはまちがっていない。また、これしかなかったともいえる。しかしまた、その道のなんと遠いことか。

『青空学園だより』の二〇一〇年十二月三十一日「行く年を送る」に次のように書いた。

私についていえば，ようやくこの歳になって，自分の立ち位置が定まってきたように思う．前にも書いたが，高校数学の周辺を掘りさげることを倦まずたゆまずやってWEB上に残しておく．周辺というのは必ずしも数学だけではない．誰かの役には立つだろう．これは頭の働くかぎり続ける．そういう営みをする人間として，情況に対し発言し，可能な行動はする．生あるうちはそれをつづける．思えばこの歳までまったく試行錯誤の連続であった．多くの人に迷惑もかけた．孔子は「四十にして惑わず」といったそうだが，こちらは還暦も数年過ぎて，ようやくそんなところである．

そして年が明けて二〇一一年三月十一日、東北地方を大地震と核惨事が襲った。それは、今の世の有様を大きく転換しなければならないことを照らし出すことであった。そしてその転換はいまも渦中にある。

少し立ち止まって考えて見れば、私のこれまでの人生など小知識人の独り相撲にすぎない。そのとき、そのときは力のかぎりするべきことはした。そのことに悔いは

ない。しかし客観的に見て独り相撲の自己満足という面があることを心得ている。人というのはそういうものだ。いくつかのことをもう少し深めたい。あとは、のちの者に託すしかない。

追悼文

亀井豊永君

二〇一一年一月十日

『数学対話』の「デザルグの定理」第1節「メネラウスの定理再考」は，一九六六年の京大の問題を対話のきっかけとした．その解3のところで「高校から一緒に受験した友だちと試験が終わってから話していると，彼は『三行で済んだ』というのだ」と紹介したその人，亀井豊永君が二〇〇六年九月三日になくなっていた．「なくなっていた」というのは今知ったのだ．

一九六六年，京大理学部を同じ高校から三人受験した，その一人だ．高校は天王寺にある大阪教育大附属．校区もなく彼は京都市，私は宇治市でどちらも京阪電車で通学していた．環状線の京橋駅でも出会うことがあった．教養部ではときどき顔をあわせたが，専攻が違ったので北部にいってから会ったことはない．入試問題の別解に驚いたこと自体，塾で高校生に教えはじめて思い出したので，彼にこのことを話したこともない．彼にとってはあまりにも自然で当然な解法であるので，その言葉がこちらの印象に残ったことも知らなかっただろう．彼はデザルグの定理を，知識としてではなく，その内容で知っていたのだ．

今年も，冬期講習のM2Wでその問題をやった．予習した人は皆ベクトルかメネラウスの定理で解いていた．その解答を確認したうえで，彼の「三行で済んだ」という話しをする．そしてどうやるんだろうと，みなで考える．気づく人がいるときもあればいないときもある．十日の夜，この授業の整理をしていて，何となく彼の名前をネットで検索してみたのだ．そうしたら「地磁気センターニュース」に訃報と追悼文が出ていた．知らなかった．二〇〇二年にM2Wを開講し今年で十年だった．この間この問題は使いつづけた．その死も知らないままに彼の話を数年してきたことになる．そこで二〇〇七年に送られてきた高校の同級名簿を見ると，確かに物故となっている．

彼もこの時代を精一杯生きたのだ．それは「地磁気センターニュース」を読めばわかる．「家業を手伝う傍ら、非常勤講師として」とある．なかなか常勤の職がないなかで，研究を続けたのだ．荒木徹京都大学名誉教授が

日本の大学のシステムでは、彼の働きに見合う処遇が出来なかったが、彼は頑固に自己流を貫き、国際的に高い評価を得た。彼の精神は、死の直前まで安定していて、

いつも職務を気にしていた。病んでなお仕事への情熱を持ち続けながら逝かねばならなかった彼の心中を思うと涙を禁じ得ない。一途さが周囲を困らせることもあったが、彼を失って改めてその穴を埋めることの困難さに気づき、学問界への無私の貢献の大きさに頭が下がる。

と書いておられるのは心うたれる．要領よく生きるということとは無縁に，ひたすら土台のところを作り続けたのだ．その貢献が国際的には認められていたというのは嬉しいことだ．

この十年間，M2W を受講してあの問題に触れた人，このように生きた人がいたことを覚えておいてほしい．授業のなかで「どうしてこれに気づいたのか聞きたいよな」といったが，それはもうできないのだ．もっとも彼は「そんなの当たり前ではないか」としかいわないだろうが．物静かで，いつも少し背をかがめていた．人間の出会いと別れは不思議なものである．いちどくらい話しをしておきたかった．改めてあのときあの解を教えてくれたことに感謝し，冥福を祈る．

その後、荒木先生から次のようなコメントを頂いた。

荒木　徹　2011/07/30 14:29

南海先生：亀井豊永君の追悼文を地磁気センターニュースに書いた荒木です．2 年ほど前に「亀井豊永氏追悼文集」を作りました．pdf ファイルでお送りできますので，ご希望でしたら，メイルアドレスをお知らせ下さい．

南海　2011/07/30 17:24

荒木先生．ご配慮ありがとうございます．本名にてメールしましたのでよろしくお願いします．

上田等さん

つぎの一文は、上田等追悼集『一期一会』（岩井会、二〇〇七年十二月）に寄せたものである。

一気に人を引きこむ魅力の人　私が上田等さんにお会いしたのは一九九〇年の秋です。それまでも上田さんのことを聞いていましたが、実際にお会いしたのは、ちょうど瀬戸田農場の下見にいって戻られたこの頃が最初でした。かつて私が属していたところと上田さんの歩んでこられたところと、その源が近かったことから、その縁でこのときお会いしたのです。ですから、私が上田さんの謦咳に触れることができたのは数年でしかありません。

初対面の私に、運動の内も外もあけすけに話しておられた辛辣な物言いが忘れらません。一気に相手を自分の内に引き入れてしまう魅力のある人でした。その後私は、政治的にも経済的にも転機に直面し、そのとき本当にいろいろとお世話になりました。経済的な問題は私にとっては初めてのことでしたが、上田さんがくぐってこられた修羅場からすれば、子供の遊びのようなものだったと

思います。一九九三年から九五年の頃、何か相談事ができれば、北摂箕面のご自宅を訪れました。いろいろ話していると、いつも何とかやっていけそうな気持ちになりました。親身になって相談にのってもらったことに心から感謝します。その後上田さんは病気になられ、病院や療養先に何度か見舞いにいかせてもらいました。そのたびに、上田さんの生命力と意志を感じ、逆にこちらが励まされているような次第でした。

上田さんの生き方から教えられたことは、人間、自分の内からの促しに応じて生きなければ、人を動かし世の中を変えていく力など生まれてこない、ということです。自分の内から生きて、そのうえで現実の壁とぶつかったとき、はじめて現実と格闘する力が生まれる。そうでないところで自分の生活や運動を作っても、そこには人を動かす力などない。そういうことです。多くの若い人たちに、どれだけ自分の内部に活動する必然性があるかを問い続けておられたし、それはまた私に対する問いかけでもありました。

上田さんは、こうして、生活と闘いが一体となった幅広い場を作って来られました。この場をどのように深め、生かすのかはこれからの課題なのだと思います。縁があって助けてもらって、今そのことをかみしめています。上田さんは、いつも将来を思いながら、今を闘いぬかれました。人間は、有限のときを精一杯に生きて、そのことにおいて、こころざしを次代に伝えていかねばならないものです。上田等さんはそれを全うされました。安らかにお眠り下さい。

飯沼二郎先生

飯沼二郎先生が逝去された。

私が飯沼先生にお会いしたのは、六〇年代末の京都べ平連のデモであった。よく集会やデモで一緒になったが、個別にお話しする機会はなかった。

次にお会いしたのは、私が党派の活動をしていた八〇年代末から九〇年のはじめの頃である。「人民戦線」を呼びかけていた。何度か京都北白川のご自宅にお伺いし、いろいろと意見の交換をした。しかし、「人民戦線」が暴力団対策法に反対するなかで、任侠の人々と共闘したとき、暴力団と一緒にするのは反対だと言われ、以後意見の交換の場はもてなかった。

私は、任侠も社会が生み出した社会的な存在であり、任侠であるというその存在だけで共闘できないとする必要はなく、暴力団対策法に反対するという一点で共闘することはあり得る、と党派を離れた今も考えている。

今はその議論はおいて、歴史的な事実として、記しておきたい。

京都べ平連の中心的な活動家でその後教育運動にかか

わり，飯沼先生の弟子のようだったKさんが，若くして白血病で亡くなったとき、その葬儀で追悼の言葉を述べられたのが、お顔を見た最後であった。

ご冥福を祈ります。

あとがき

私の後半生は、高校生に数学を教えることを生業としながら、電脳空間の仮想学園である『青空学園』の場において、日本語の再定義とその言葉による教育数学の構築を続けることであった。

それは、日本語に伝えられてきた里のことわりをもういちど取り出し、これからの世、具体的には非西洋にあって最初に近代化したこの日本語世界の将来を見すえ、その時代に向かう人の礎となることを、念頭においた営みである。

党派の活動を終え残務を処理してからしばらくは、授業以外は机上の仕事に集中していた。それからおよそ十年を経て、このような営みを続けているひとりの人として、再び世の人との実際のつながりの中に出てゆくことをはじめた。

まさにそのとき、東北大地震と東電核惨事が起こった。私はこの惨事のなかに、今の世のあり方を根本から変えなければならないという声を聴いた。しかし、為政者は逆にこの災害に便乗して、世をいっそう資本の論理が露骨にまかり通りうるものに変えてきた。

この動きをおさえ、私は、一方でなし得るところからこのような動きに対抗するべく起こってきた人々の運動に加わるとともに、一方で自らの住む地元で地域の人々の輪を深めるための仕事に力を割いてきた。それをとおして多くのこを考え学ぶことができた。

二〇一三年の秋、器質化肺炎を患い、五週間の入院を経て完治まで一年かかった。安易に漢方薬を飲んでいたことと夏の疲労の蓄積の結果ではないかと思う。それ以降、消化補助剤以外の薬は飲んでいない。

それらのうえに、二〇一六年から二〇一八年にかけて、いくつかの雑誌に寄稿するとともに、『神道新論』と題した書を世に問うた。その書のあとがきにも書いたが、この一冊を書くのに二十年かかったという思いと、これは身を削って後の世代への遺言を書くようなものではないかという思いが重なることであった。まさにこれは、私の人生の一つの集約であり、微力ではあるが、この世に、開かれた問いを投げおくものでもあった。

時代の中でなにがしかの仕事をして生を終わればそれでよい。人というものは、次の世代の人生が幾ばくかはわれわれの世代より深まったものとなってほしいと思うものである。これからは、いのちあるかぎり、青空学園をわが里にして、ここを拓き耕し、小さな歴史が大きな

歴史を動かすという人々の動きの一端をにない、なし得ることをし続けて、そして土に還るのみであると考えている。

人生をともにしてきた家族と困難なときに助け合った友人に心から感謝する。

関連図書

[1] ハイデッガー．巻頭言（『理想』444 号）．理想社．1970

[2] ハイデッガー．言葉についての対話より（1953/54 年）．全集第 12 巻．創文社．1996

[3] 小林惠子．三人の神武．文藝春秋．1994

[4] 小林惠子．解読「謎の四世紀」．文藝春秋．1995

[5] 小林惠子．広開土王と「倭の五王」．文藝春秋．1994

[6] 小林惠子．興亡古代史．文藝春秋．1994

[7] ヘーゲル．長谷川宏訳．『精神現象学』．作品社．1998

[8] 宇治谷孟．全現代語訳・日本書紀．講談社．1988

[9] 梅山秀幸．かぐや姫の光と影．人文書院．1991

[10] 宇治市．宇治市史．全七巻．1983

[11] 中江兆民．一年有半・続一年有半．（井田進也校注）岩波書店．1995

[12] 加賀野井秀一．20 世紀言語学入門．講談社新書．1995

[13] 柳父章．翻訳語成立事情．岩波新書．1982

[14] アルチュセール、L．資本論を読む（今村仁司訳）．筑摩書房．1997

[15] 今村仁司．アルチュセール（現代思想の冒険者たち 22）．講談社．1997

[16] 酒井直樹．死産される日本語・日本人．新曜社．1996

[17] 酒井健．バタイユ入門．筑摩書房．1996

[18] 鈴木正．日本哲学史論への反省的考察（『近代日本の哲学』第二章）．北樹出版．1983

[19] 古田光．近代日本哲学思想小史（『近代日本の哲学』第一章）．北樹出版．1983

[20] 中山元．フーコー入門．筑摩書房．1996

[21] 岸根卓郎．見えない世界を超えて．サンマーク．1996

[22] 野崎守英．歌・かたり・理―日本思想の姿と構造―．ぺりかん社．1996

[23] 加藤周一．日本文学史序説下（加藤周一著作集５）．平凡社．1980
[24] 大橋良介．日本的なもの、西欧的なもの（新潮選書）．新潮社．1992
[25] 時枝誠記．国語学原論．岩波書店．1941
[26] 時枝誠記．日本文法口語篇．岩波書店．1950
[27] 細谷貞雄．ハイデッガーの業績（『理想』444号）．理想社．1970
[28] 内田義彦・木下順二．森有正について（『展望』236号）．筑摩書房．1978
[29] 井上ひさし．ニホン語日記．文藝春秋．1996
[30] 森本哲郎．日本語表と裏．新潮社．1985
[31] マルクス．経済学批判・序論．1859
[32] 高畑尚之．人類進化の試行錯誤．科学 VOL．64 NO．11、1994．岩波書店．1994
[33] 小原秀雄（日本科学者会議編集）．人「人」に成る（科学全書15）．大月書店．1985
[34] オパーリン、アレクサンドル＝イヴァノヴィチ．生命の起源（岩崎新書51）．岩崎書店．1955
[35] オパーリン、アレクサンドル＝イヴァノヴィチ．生命―その本質．起源．発展―．岩波書店．1962
[36] 中村運．生命を語る、その思想の流れ．化学同人．1988
[37] 中村雄二郎．生命の始まりとリズム．1994
[38] 柳川弘司．生命はＲＮＡから始まった．岩波科学ライブラリー16．岩波書店．1994
[39] 今堀宏三（編）．ライフサイエンスの基礎．講談社．1981
[40] Ｓ．Ｊ．グルード．ワンダフル・ライフ．早川書房．
[41] Ｌ．Ｅ．オーゲル．生命の起源．日経サイエンス、12、1994．日経サイエンス社．1994
[42] 金静美．水平運動史研究―民族差別批判―．現代企画室．1994
[43] 金静美．故郷の世界史－解放のインターナショナリズムへ－．現代企画室．1996
[44] 太田昌国．〈異世界・同時代〉乱反射―日本イデオロギー批判のために．現代企画室．1996
[45] 宮崎　学．突破者―戦後史の陰を駆け抜けた五〇年．南風社．1996

[46] 見田宗介．現代社会の理論―情報化・消費化社会の現在と未来―．岩波書店．1996

[47] マッキベン、ビル．自然の終焉．河出書房新社．1989

[48] サロー、レスター・C．資本主義の未来．ＴＢＳブリタニカ．1996

[49] ベルク、オギュスタン．地球と存在の哲学―環境倫理を越えて．筑摩書房．1996

[50] 荒木博之．やまとことばの人類学．朝日選書 293．1983

[51] 大野　晋．日本語をさかのぼる．岩波新書．1974

[52] 大野　晋．日本語について．岩波同時代ライブラリー．1994

[53] 大野　晋．日本語の成立．日本語の世界1．中央公論社．1980

[54] 大野　晋．日本語の起源　新版．岩波新書．1994

[55] 小田　実．デモクラティア．筑摩書房．1996

[56] 小池清治．日本語はどんな言語か．ちくま新書．1994

[57] 村上泰亮．反古典の政治経済学要綱－来世紀のための覚書－．中央公論社．1994

[58] ホーキング，スティーブン＝W．時間順序保護仮説．ＮＴＴ出版．1991

[59] ホーキング，スティーブン＝W．ホーキング、宇宙を語る，ビッグバン．早川書房．1989

[60] ホーキング，スティーブン＝W．宇宙における生命．ＮＴＴ出版．1993